星空のむこうの国

集英社文庫 コバルト・シリーズ 話題作好評発売中

いま人気急上昇！
あったか♥（ハート）のニューSF。
小林弘利の本

夢の中で出会ったきみは誰？・
新井素子絶賛のデビュー作。

星空のむこうの国

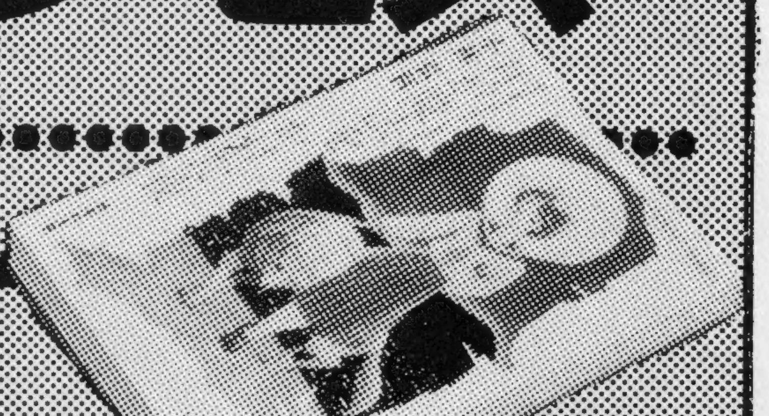
映画原作

昭雄の夢に何度も現れる美少女。話しかけても悲しそうな目をしてみつめるだけの少女が、昭雄は気になってしかたない。クラスメートに話しても笑われるし、昭雄を恋する愛弓にも気づかないのだ。ある日昭雄は駅のホームで夢の少女に出会った——！
●定価280円

きみをたすけにいく、必ず。テレパス少女・静香と翔平の恋！
いつかやさしい雨が
●定価340円

山の頂上から発掘された巨大な帆船。そこに眠る美少女とは!?
タイム・トラブル・プリンセス
●定価360円

月の光があたしを魔物に変える…少女・秋の恐るべき秘密とは!?
月が魔法をかけた夜
●定価320円



集英社

〈解説〉

『タイム・トラベラー』『謎の転校生』など筒井康隆、光瀬龍、眉村卓らのＳＦジュブナイルの数々を映像化した、往年のＮＨＫテレビドラマ「少年ドラマシリーズ」は、傑作として名高く、当時小中学生だった現在の２０代の若者たちの心に今だに強烈な印象を残しています。

その人気の秘密は、身近な中高生が日常世界から次第にＳＦワールドへとひきこまれていくというＳＦ的擬似体験の面白さとともに、明確なテーマ性と、それを裏打ちするために効果的に使われているＳＦ的設定だといえるでしょう。

その「少年ドラマシリーズ」の世界を、映画として現代に復活させたのが、この『少年ドラマシリーズ　ＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ－星空のむこうの国』です。

この作品は、小林弘利の脚本が映画に先がけて彼自身の手によって小説化され、新井素子さんの賞賛を受けて集英社文庫コバルトシリーズから出版され、すでに人気を呼んでいます。そして、これまで自主製作映画でも一貫してＳＦジュブナイルを撮り続け、高い評価う得ている２２才の新鋭・小中和哉が遂に映像化しました。

ヒロインの理沙に、昨年『中卒東大一直線　もう高校はいらない』（ＴＢＳ）でデビューし、これが映画初主演となる期待の新星・有森也実が扮し、フレッシュな演技を見せているのも話題です。

なお、この『少年ドラマシリーズ　ＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ－星空のむこうの国』は、東京・池袋の映画館“文芸坐”による本格的な映画製作作品です。

（上映時間　１時間１６分）

PHOTO STORY

☆夢の中の少女を追って、昭雄はパラレル・ワールドに迷い込んでしまう――

「また、同じ夢だ・・・」

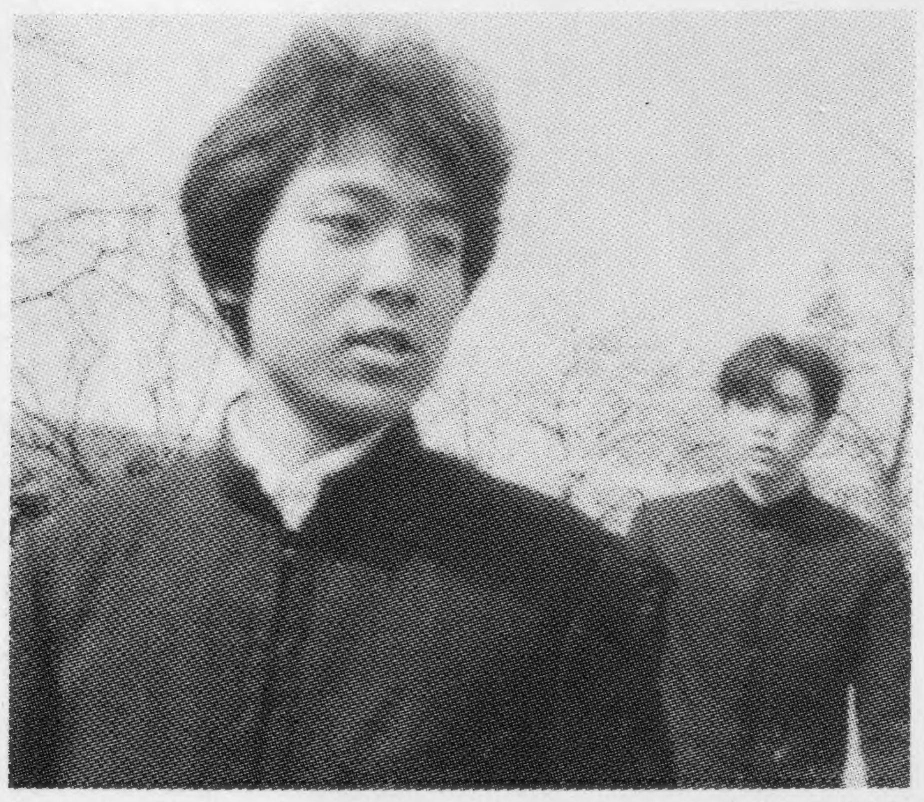
「昭雄！」

「もうー！！」

「夢の子がいたんだ！」

「車を止めて！」

☆不治の病に冒された少女の願いが、昭雄をこの世界に呼び込んだのか――？

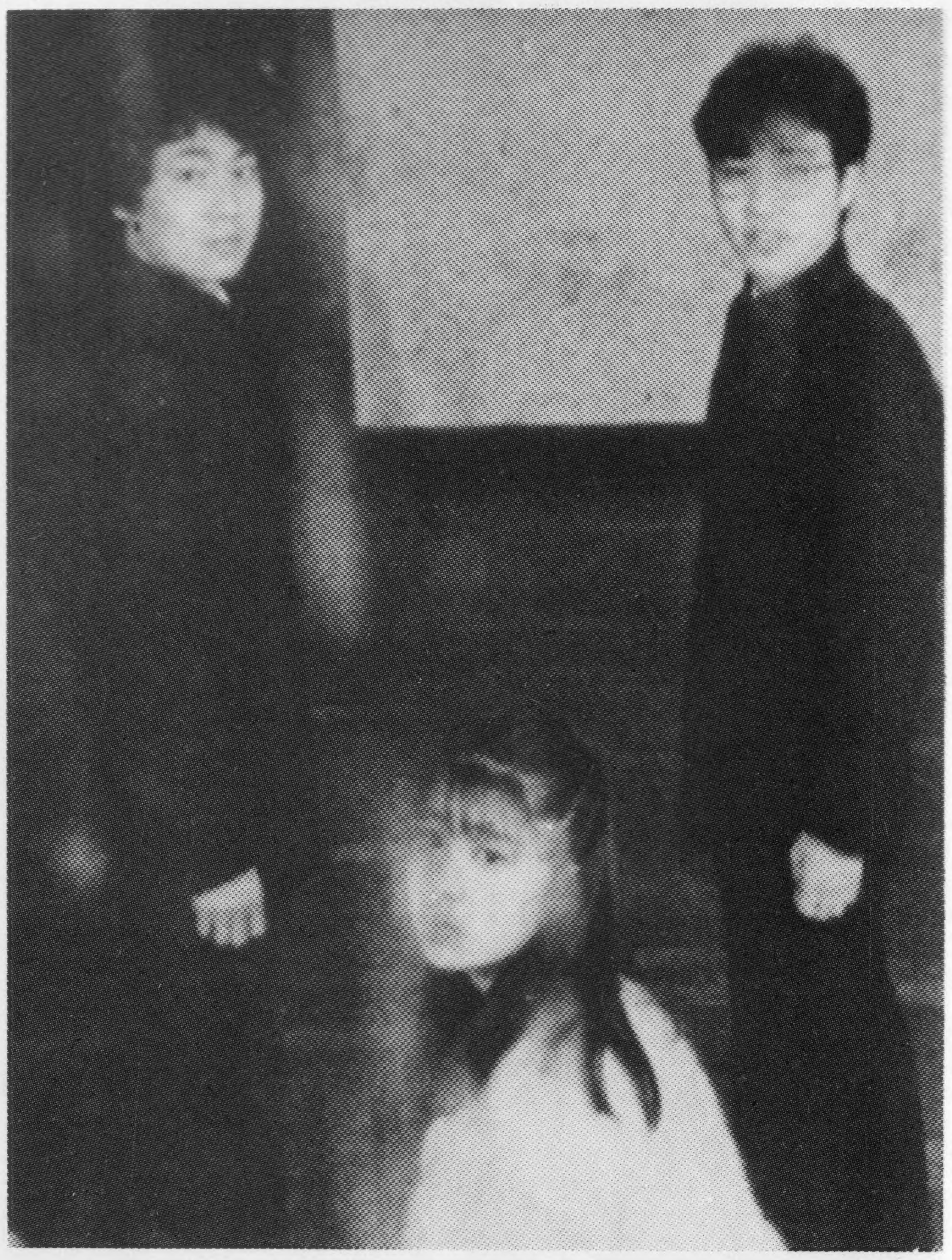


「理沙っていうのか、あの子？」

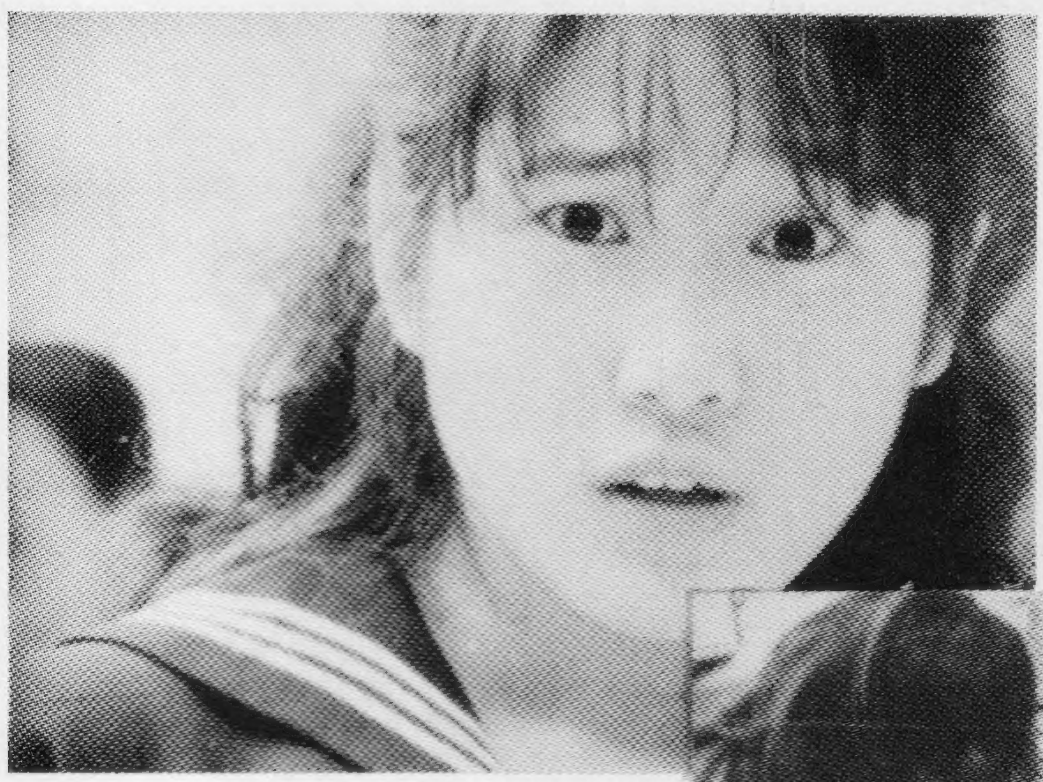
「・・・即死だった。」

「問題は何でお前がここにいるかってことだ。」

「あいつだ・・・」



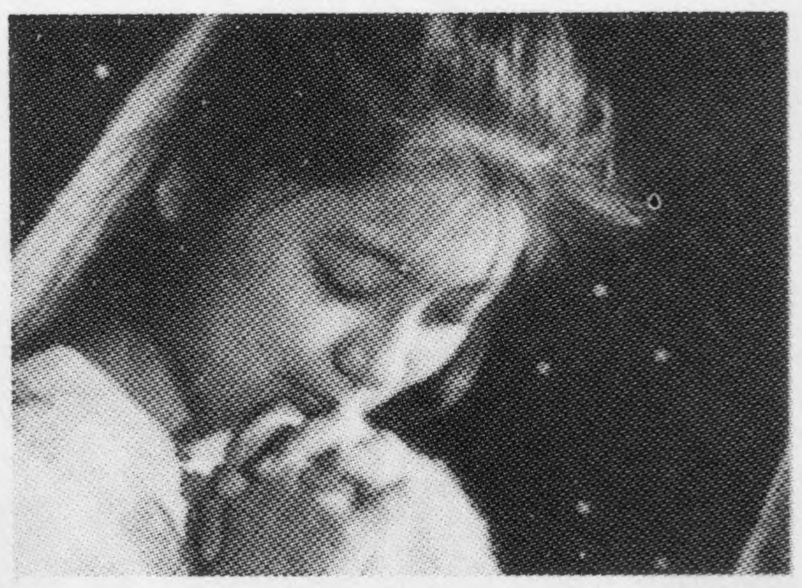
「雨・・星が、見えない・・」



☆そして、二人の逃避行が始まった——

「殺すつもりか！？」

「あ、あそこ！」



「いや、私、帰らないわ・・」

「昭雄くん・・・？！」

☆だが、時空の修正作用は昭雄の身に迫りつつあった。

「バカな、ユーレイがいるわけないじゃないか」

「昭雄のユーレイが
出たんだって！」

「間に合わないかも
しれないな・・・」

CAST

有森也実

（理沙）

理沙は、ひたむきに一生懸命、人を愛しました。こんな純粋な恋に、女の子ならば、多かれ少なかれ、憧れを持っているでしょう。ヒロインの理沙は、このような純粋な心を持っている女の子の、素晴らしさを教えてくれた役でした。

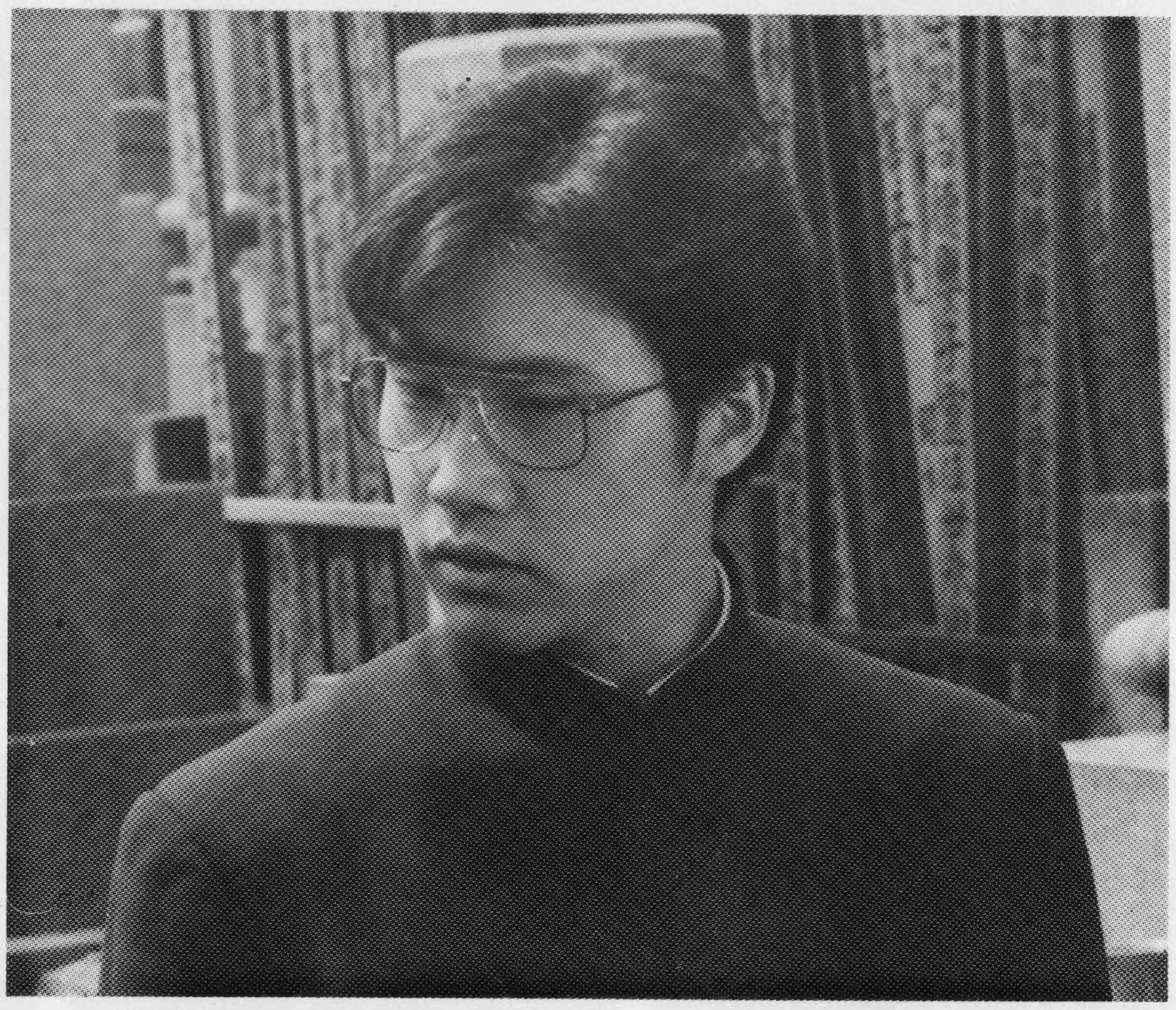
８４年「もう高校はいらない」（ＴＢＳ）でデビュー。８５年「ＯＨ！わが友よ」（ＴＢＳ）のヒロインで注目を集める。

神田裕司

（昭雄）

スタジオに入りながらこう考えた。
演技を求めれば無理がある。
脚本に目をやれば閉じられる。
カメラは廻ったがもうダメだ。
とかくボーッとした役はやりにくい。
“映画は水もの
やうやうできてくる瀬戸際
少しわかりて
「あきお」といいたる役の
とても好きになりたる・・・”

子役時代は「レッドビッキーズ」などに出演。最近は演出もこなして、関と共に劇団「神田組！！」を創立。



関　顕嗣

（尾崎）

話したくて言えない言葉を磨いていたら星になった。言いたくなくて話せなかった言葉を砕いていたら星になった。

ＰＦＦ８１，８２にそれぞれ入選した「レモン色の恋」「ＦＡＤＥ　ＩＮ」を神田と共に製作。現在３年ぶりの新作（１６㎜）を二人で準備中。

藤掛聖子 （美知・兼メイク）

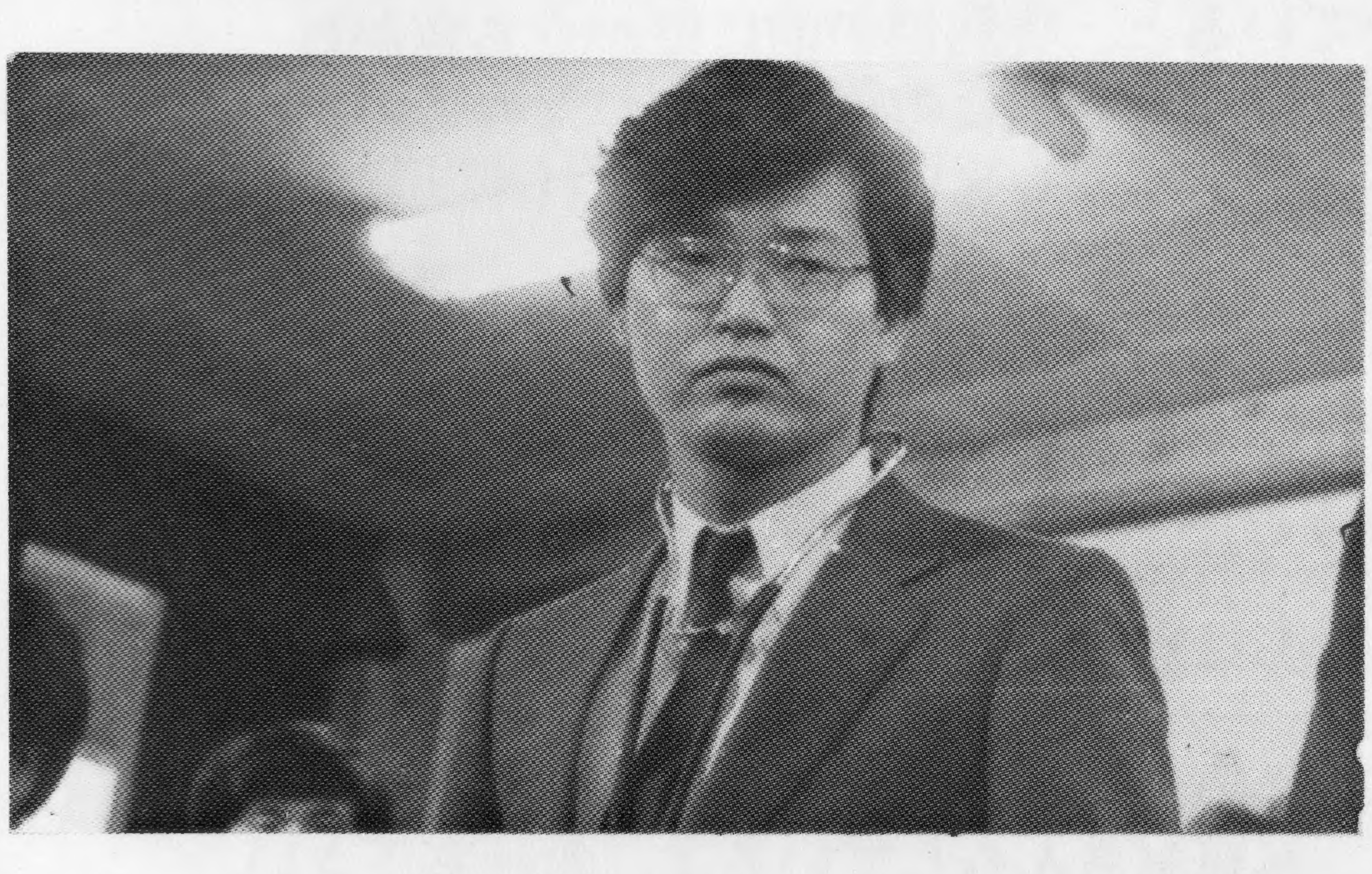
撮影中のことは夢中だったんであまり覚えていません。監督には、これからも夢のある作品を作ってもらいたいと思います。

> 映像松山組作品「ザッツ・グロ」「ピエロの恋の物語」「真夏の夜はNO・TIME」などに出演。

吉田篤郎 （努）

少女の願いは、正に時の流れをも変えてしまう。こーんな純粋無垢な女性に出会ってみたいもんですよ。かくいう私は純粋な田舎者です。

> 明星大中退後、広告代理店で雑誌の編集に携わる。監督作品に「YOU・・・麗華」がある。

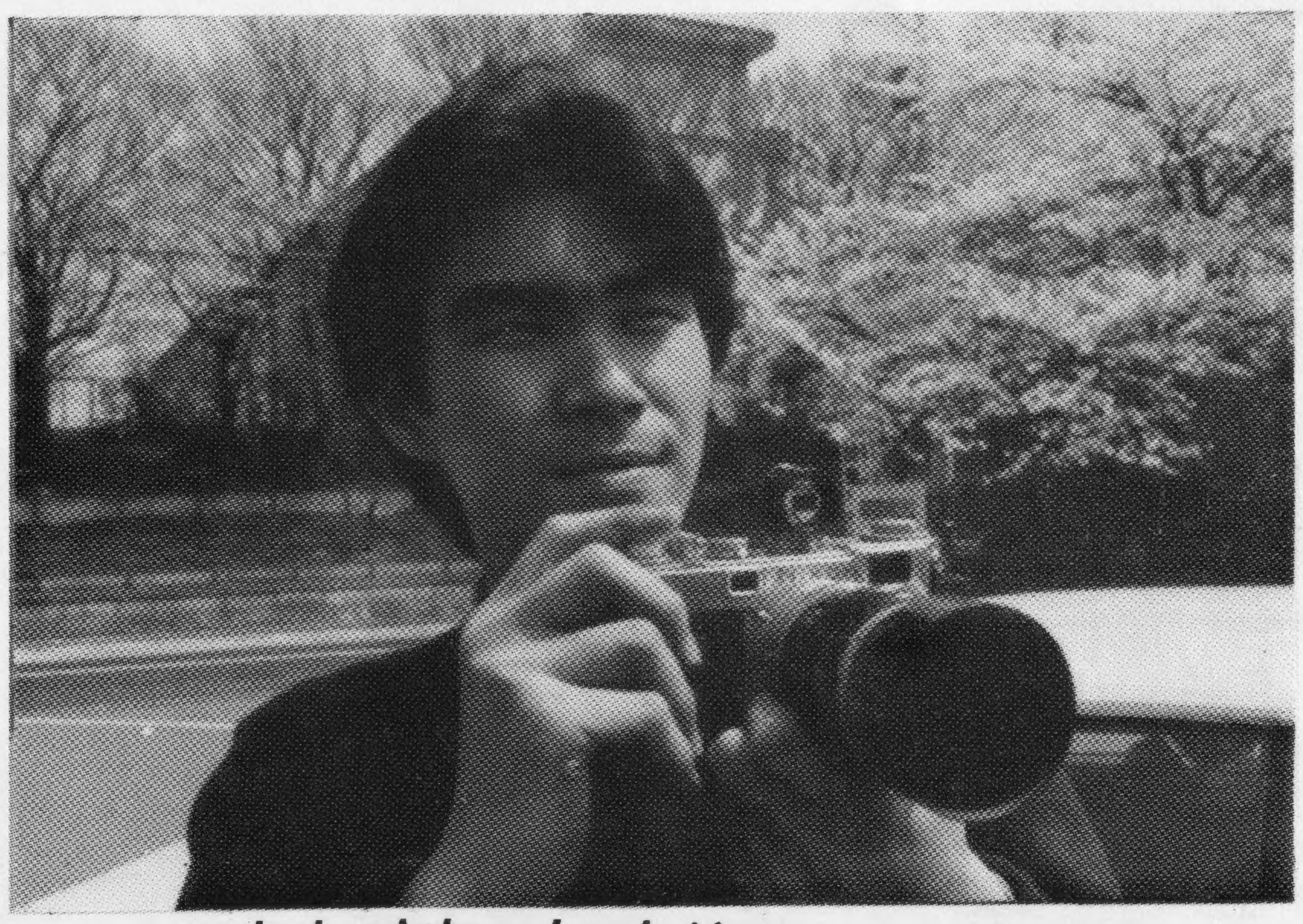


岡部美鈴 （圭子）

きたない音声とみにくい姿で小中さんのすてきな映画に汚点を残してしまったことをおわび致します。

私、原田知世ちゃんの大ファンで“時かけ”は１０回以上見てしまったのですよ。

> 明治大学３年。ＴＢＳ緑山塾１期に応募２期生として卒業。今は単なる真面目な女子大生？



神藤光裕 （拓郎・兼助監督）

こんにちは、神藤光裕です。本業は大学生なんですが、どういう縁かこのところ役者づいている私です。この映画に参加して本当にさまざまな面で勉強になりました。

> 立教大学３年。ＳＰＰ前部長。「ドレミファ娘の血は騒ぐ」などにも出演。監督作品としては「カレッジ・ライフ」などがある。

木村善孝 （上田）

撮影中は、朝が早くて大変でした。アフレコにも苦労しました。

> 舞台を中心に演劇活動をしている。ミュージカルなど出演作多数。

STAFF

一瀬隆重（企画）

この作品は、小中の卒業制作のつもりで手伝った。もう次からは、アマチュアの甘えは通用しないよ。今回は企画でしか参加できなかったが、近い将来、今度は仕事で組もう。

いちせ会の代表として「理想郷伝説」などを監督、関西では知られた存在だった。プロデューサーに転じ、「星くず兄弟の伝説」（手塚真）などを手掛ける。

森山　繁（特殊音響）

『落ちぐま』の地獄の録音から３年目の夏がやって来た。あの日々を思い懐かしみ、あの時は若かったと感傷に浸っていると、電話のベルが鳴り響いた。「どぉも。小中ですぅ。実はですね・・。」それ以来、私の休日と夏休みが消え去ったのは言うまでもない・・・・

現在、千代田芸術学院講師。「地球に落ちて来たくま」「フェアリー・テール」等の録音を手がける。

片山竹雄（照明）

何だ！集合時間から３時間もたってるゾ！何してるんだまったく！貴重な日照時間をもったいない！明りはいったいどうするんだ！・・・と思いつつ映画は完成。改めてスタッフの情熱に脱帽。そして私の映画に対する初心を思い起こされた。

「神田川淫乱戦争」「ドレミファ娘の血は騒ぐ」でも瓜生とコンビを組む。

角田　亮（助監督・兼美術）

それは映画のように始まった。「春休みあいてない？」深夜の電話の一言が私をその後数カ月、映画三昧、ほかほか弁当三昧の生活へ誘う罠だったとは、誰が予想できただろうか。

立教大学３年，ＳＰＰ所属。監督作品として「よくあること」「ハローホレス・ママは元気」がある。現在新作撮影中。

平野和重（スチール・兼上田の助手役）

途中から参加した僕でさえ、早朝から深夜に及ぶ撮影にはバテ気味だったのだから、他のスタッフは大変だったことでしょう。御苦労様でした。

メディア・ワークショップ所属。監督作品に「収穫の日々」「二つの夜と三つの鏡」などがある。

小林弘利（脚本）

まず、この映画の完成へ向けて走り回ったであろう沢山の現場スタッフの皆様、本当にお疲れ様でした。それからこの映画を観に来て下さった皆様どうもありがとうございます。楽しんでいただければ嬉しいのですが—。

他の脚本作品として大島弓子原作『赤すいか黄すいか』新井素子原作『グリーン・レクイエム』等あり

桜井　徹（撮影助手）

撮り直し？　俺用事思い出した。それじゃ。

映像松山組助監督を経て、現在ＩＶＳテレビＡＤ。

浜田耕作（プロデューサー）

自分達の見たい映像は、自分達で創る。それが、映像で育った、我々の世代のメッセージだ。小中和哉は、そんな我々の思いを、この「星空のむこうの国」で全面的に展開してくれた。

メディア・ワークショップ所属。監督作品に「風に吹かれて」などがある。春からはネクサスの社員。

瓜生敏彦（撮影）

こういうの苦手なんだよね。作文なんて中学以来やってないし。後で読み返すと恥ずかしいでしょ。なんかてきとーに書いといてよ。

小川プロで映画製作を学ぶ。「神田川淫乱戦争」「ドレミファ娘の血は騒ぐ」で黒沢清監督とコンビを組む。

塩田明彦（照明）

「星空のむこうの国」の撮影が終わってからのことだ。ある友人が家族に“映画を見に行く”と告げたまま謎の失踪を遂げたのです。問題の映画館とその男の名は特に秘すが、これは嘘のような本当の話なのです。

主な監督作品に「ファララ」「星影のワルツ」等がある。最近は画家としての活動に専念している。

中平勝之（助監督）

撮影許可申請の書類を見ながら東京駅を歩いていると、突然目の前に壁が立ち塞がり、間一髪でその壁との衝突は免れたものの、私はうろたえてしまいました。壁は東関親方でした。

立教大学２年，ＳＰＰ所属。監督作品として「木の都」がある。

斉藤純二（写真効果）

撮影は忘れた頃でもやってくる人災です。桑原、桑原。

来年中大入学６周年を迎える。中大写真会所属。写真屋さんもしているよ。お仕事下さい。

丹羽多聞(進行)

この映画はスタッフの間で、使ったフィルムは16㎜だが、監督の目指すのは35㎜並の内容、しかし現場は8㎜のような自転車操業だと言われていた。さて、出来上がった映画は何㎜かな？

成蹊高校映研を経て、現在成蹊大学映研所属。ヤンジャン・シネフェスグランプリ「桃とりゲーム」の作者として有名。

村井俊夫(音楽)

小中映画の音楽製作も、はや3作目になりますが、小中映画独特の味を一層ひきたたせようと試み、pianist の佳子ちゃんとの共作という形を取ってみました。いかがでしたでしょうか？また、この場を借りて、mixer の森山さん、drummer の長井君、guitarist の青木君に厚く御礼申し上げます。

成蹊高校映研時代から音楽製作を手がける。「FANTASTIC PARTY 」（手塚真）「終（しゅう）」（寺田裕之）「時はいつでも過ぎていく　そして今僕達は・・」（笹平剛）などの作品の音楽を担当。

木住野佳子(音楽)

ある日、私の作った曲を聴いていた村井君が、“映画音楽をやってみないか”と言いました。苦労したのは、テーマ曲のストリングスのアレンジかな・・・。時間が足りなかったけど、おもしろかったです。

音大卒。現在は、赤坂のパブでピアノを弾いている。

鍬田早苗(記録)

撮影のあいだ、半分以上ちなつのアパートに居候していた。お風呂は近くの銭湯に行った。250円もするのでびっくりした。なのにパイゲンCは置いてなかった。牛乳もないフルーツジュースもない。もちろん、栓抜きの針も壁にぶらさがっていなかった。

立教大学3年。SPP所属。現在、二本目の監督作品に取り組んでいる。

進藤丈夫(アニメーター)

あにめーたーのしんどうさんは、とてもきのちいさいひとです。「はい」と「すみません」しかいえません。うちにかえって、しくしくなきながらあにめをかきました。

法政大学3年。PFFに入選した「MARK」等のシネカリアニメの達人として有名。

久保田祥子(衣裳)

思い出すのは、夜中も大分廻った時間に、一台の車が私の家の前に止まり、中から目を真赤にした数人の男の人がはい出てきて、家の中で一杯のコーヒーを飲み、再びふらふらと去っていく光景です。

立教大学4年，SPP所属。「ファララ」「ドレミファ娘の血は騒ぐ」などに出演。監督作品として「ジンタに踊る学園」がある。

河村　豊
(CANET)（特殊機材・特撮監修）

この映画はなんとすごい映画だ。この映画の為にオプチカルプリンターを作ってしまったのだから。今まで一本の映画のためにオプチカルプリンターを作ったのは「スターウォーズ」くらいじゃないかな。だから小中君の映画はスタッフ泣かせなんだ・・・。

千葉工大映研時代には小型映画誌上で「河村豊の特撮工作」を連載していた。現在、トーヨーリンクス勤務。

神定封之(国鉄ロケ・コーディネーター)

初めて小中氏の作品「落ちぐま」を見てから、彼のファンになりました。今回は、彼の製作スタッフに加えてもらい、感謝感激です。

昭和30年10月2日生　30才

花岡ちなつ(会計)

現場初参加の私は、何もできないので、何でもしました。元気がなければ、映画はできない（なんでもそうですが）と思いました。みなさん、これからも元気でいようね。

成蹊大学3年。所属団体ナシ。映画製作に興味を持ち、小中監督に連絡をとったところ、飛んで火に入る夏の虫となる。

「星空のむこうの国」製作日誌

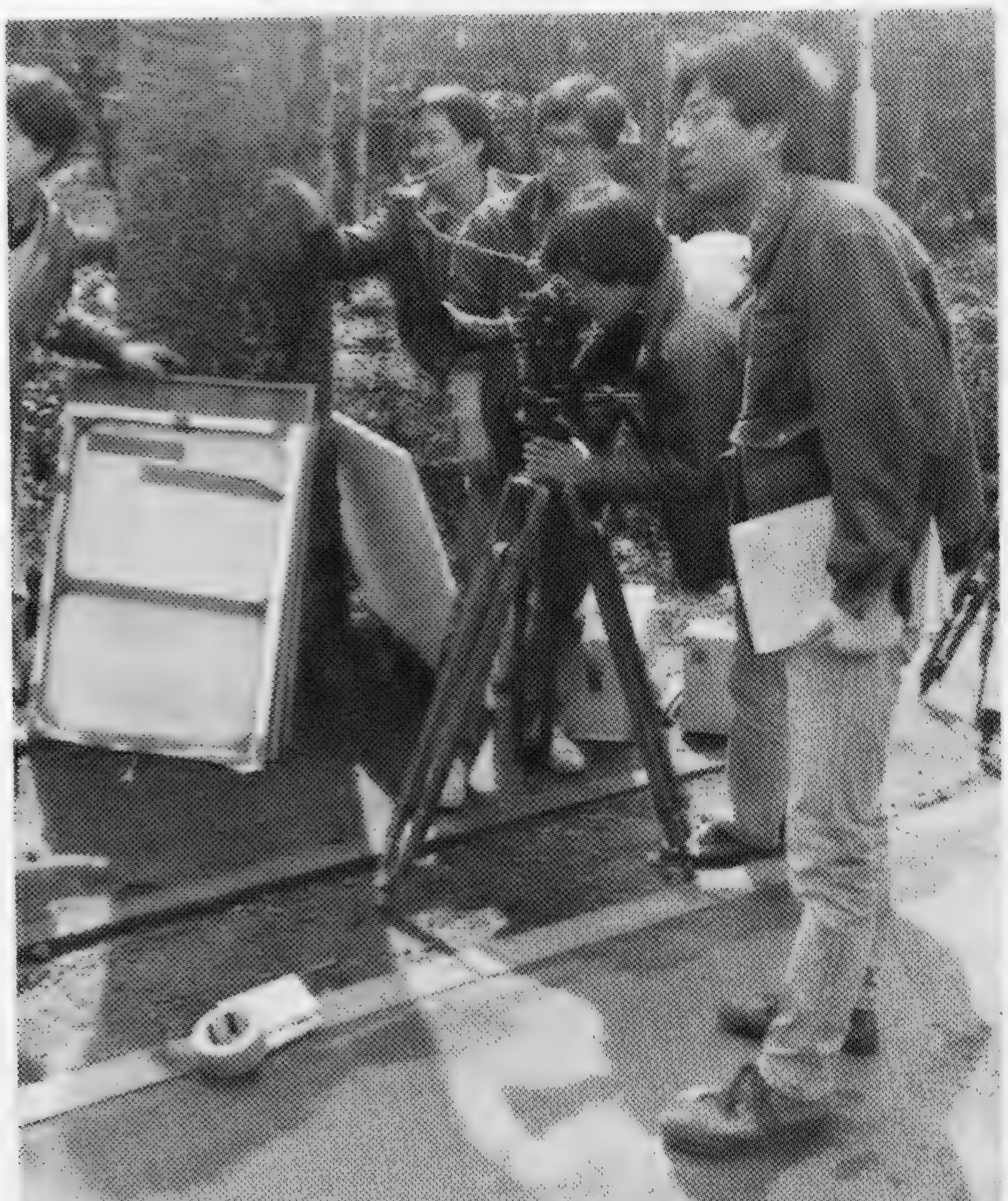
〈プレ・プロダクション〉

○１９８２年　１１月２１日
　小中家にて、一瀬、小林、小中の顔合わせ。以前から出ていた、一瀬が小中監督の次回作を１６㎜作品としてプロデュースするという話が本決まりになる。
○１１月２２日
　小中、小林の第一回脚本打ち合わせ。
　小中の、『ある日どこかで』のセンのＳＦラブストーリーという希望にそって、小林がテレパス少女の話を提案。仮題を『ＰＥＮＮＹ　ＲＡＩＮ』とする。
○１９８３年　３月１６日
　小林と共に作ったストーリーを、小中が文章化したシノプシスが完成。
○４月４日
　『ＰＥＮＮＹ　ＲＡＩＮ』は、高度な内面的演出が要求される話なので、現在の小中にはちょっと無理ではないかということになり、保留にすることが決定。
○４月２１日
　小中、新宿駅のホームで、ふと、パラレル・ワールドもののラブ・ストーリーの設定を思いつく。
○５月３日
　小中、一瀬に新しいアイディアを語る。
○８月２日
　小中、小林の脚本打ち合わせ。小中の出した、二つの世界の二組のカップルの話に、小林が女の子の方を病気にするといった設定を加えていって、だいたいの輪郭ができた。
○８月２４日
　脚本打ち合わせ。小林から、二人のデートを流星を見に行く設定にするアイディアが出る。
○９月８日
　小中、シノプシスを仕上げる。
○９月１８日
　小林による第一稿、完成。タイトルは、１１月の訪問者』。
○１０月２７日
　小中による第二稿、完成。パラレル・ワールドの説明をジャングルジムでやる設定にする、墓地のシーンをつくる、昭雄たちが上田に追いつかれる場所を商店街にするｅｔｃの変更。
○１１月２２日
　小中、神田と会い、出演交渉。昭雄役、決定。
○１２月２７日
　小林による第三稿、完成。昭雄の友人役として、努（映画研究部）と拓郎（心霊研究部）、昭雄を憧れるクラスメートに圭子を登場させる。
○１２月２８日
　スポンサー探しが難行しているので、来春の撮影予定を、秋まで延ばすことが決定。
○１９８４年　１月２７日
　小中、河村、第一回特撮打ち合わせ。
○２月２０日
　小中による第四稿、完成。圭子の役を、クラスメートでなく後輩にして、その友人役でキャピキャピとうるさい子を美知とする。
○３月２１日
　小中、村井、第一回音楽打ち合わせ。
○５月２日
　ダイアローグ面で藤田が手を入れたものを小中がまとめた第五稿、完成。
○５月１８日
　小中、新井素子さんと共にコバルト文庫の石原編集長のところへシナリオを持って行き、ノベライズ版の出版を交渉。
○６月１日
　小中、コンテ作業にはいる。
○９月１９日
　小中、瓜生と会い、撮影を依頼。
○９月２７日
　小中、河村、特殊機材打ち合わせ。ミニクレーン兼レール、車のバンパーにカメラを取り付けるアダプター等、作る機材を決める。
○１０月２２日
　小中による第六稿、完成。昭雄が天文部に入っている設定になる。拓郎：心霊研究部→写真部、努：映研→天文部にそれぞれ変更。教室で二つの月を見るエピソードも加わる。
○１０月２６日
　コンテ完成。総カット数が７００以上になってしまったので、一瀬、２／３に減らすように要求する。スポンサー交渉進展せず、撮影、またしても来春まで延期することが決まる。

○11月10日
コバルト文庫よりノベライズ版出版。小説化を期に、題名を『星空のむこうの国』と改題する。
○11月29日
現場のプロデュースを浜田が担当することが決まり、一瀬と顔合わせ。
○12月5日
葉が落ちきらないうちに実景だけでも撮ろうということで、成蹊の並木道で、朝の登校風景を3カット撮る。
○12月22日
文芸坐に企画書を提出。
○1985年　2月26日
池袋・滝沢にて、スタッフの顔合わせ。
キャスティング、ロケハン、小道具、衣装、それぞれ急ピッチで進み始める。
○3月17日
小中による第七稿（決定稿）完成。昭雄が天文部という設定なくす。上田が尾崎家に来るシーンが追加。
○3月19日
難行していた理沙役が、有森に決定。
○3月23日
リハーサル開始。
○3月26日
クランク・インを翌日に控えて、オールスタッフ・キャストミーティング。

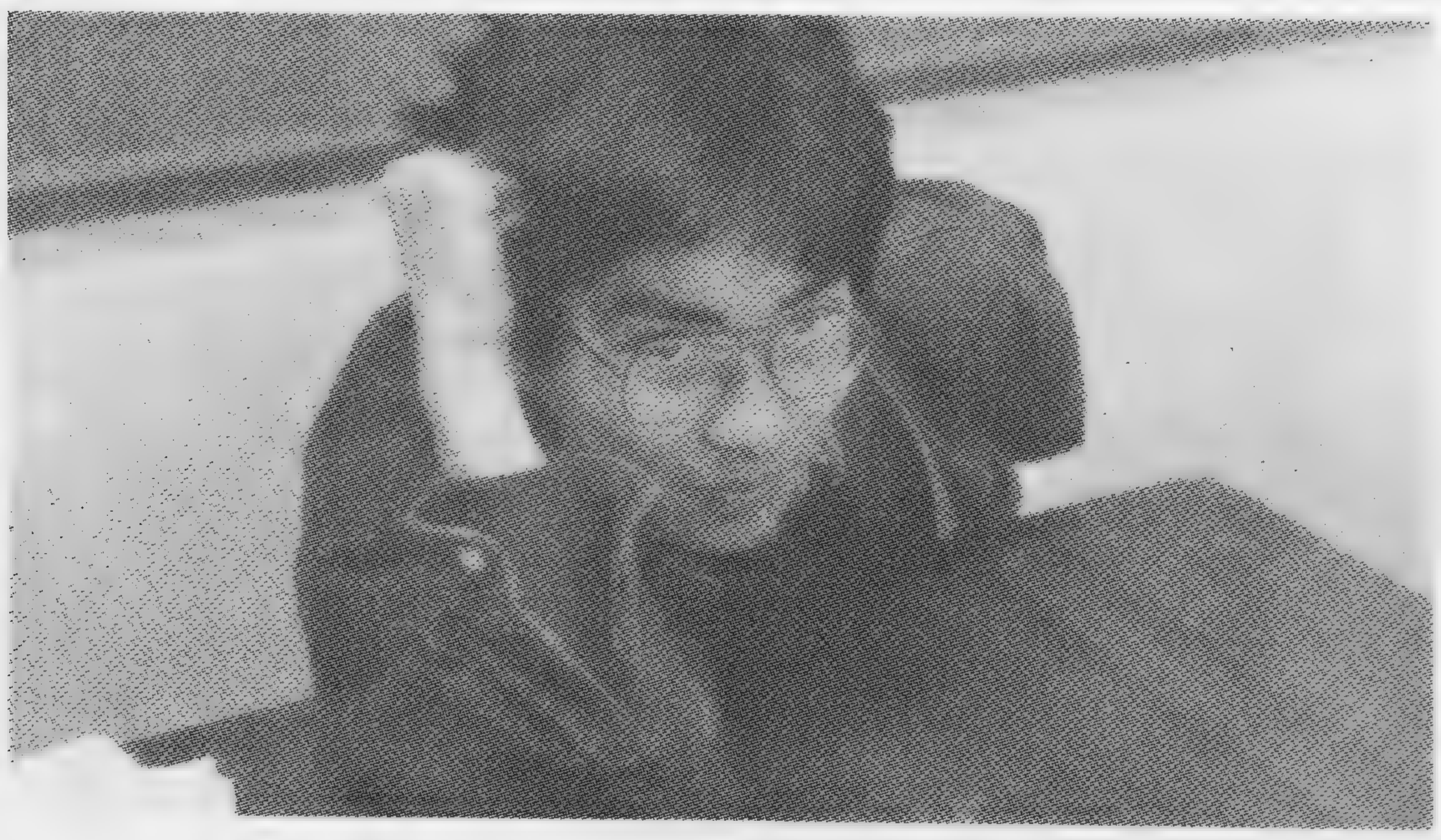
〈撮　影〉

○3月27日
クランク・イン。
am7：00、成蹊大学集合。生憎の雨天。小雨もぱらつく。最初に、冒頭の昭雄・尾崎らの下校シーン。前日までの準備に追われて早くも体調の崩れを訴えるスタッフも出現。なかなか前途多難のスタートを切る。
am9：00、有森也実嬢、笑顔ではつらつと登場。初日は気合の入った撮影で、無謀とも思われるスケジュールをこなす。
○3月28日
午前、下校風景シーン。（並木道、下駄箱部室）
午後、夜の教室シーン。
並木道での撮影では、圭子役の岡部美鈴が転倒シーンを熱演。本物の流血シーンとなる。



夜の教室シーンでは、主演の二人による、ロマンティックなシーン。いきなり二日目に難しいシーンで、役者の演技に熱がこもる。
○3月29日
全日、学校シーン。
この日は、エキストラが60人近く出演。スタッフ一同、この日のエキストラ集め，衣裳集めに、前日深夜まで奔走す。エキストラ集めの出来るアニメーターと異名をとる進藤丈夫、ここでも大活躍。
エキストラに混じって、監督も出演したいと主張。スタッフの制止を振り切って、学生服に身を包み、とても22才とは思えぬ高校生ぶりを発揮。
ランチタイムに、初のラッシュ試写会が行われた。スタッフ一同、思った程の出来には仕上がっていずに落胆。有森、16㎜フィルムを見て、『こんなに細いんだ』と発言。8㎜フィルムに慣れ親しんでいるスタッフは、この発言にギャップを感じる。

このころから夜のロイヤルホストでの、スタッフ打ち合わせが定例化する。監督はこの打ち合わせのころになると、撮影の緊張から解放されるためか、すっかり放心状態で、時によると、口をだらしなく開けて眠りこけてしまう。心優しいその他のスタッフは、監督抜きで打ち合わせを完了。『監督、打ち合わせ済みましたよ。帰りましょう。』ホント、よくできたスタッフです。



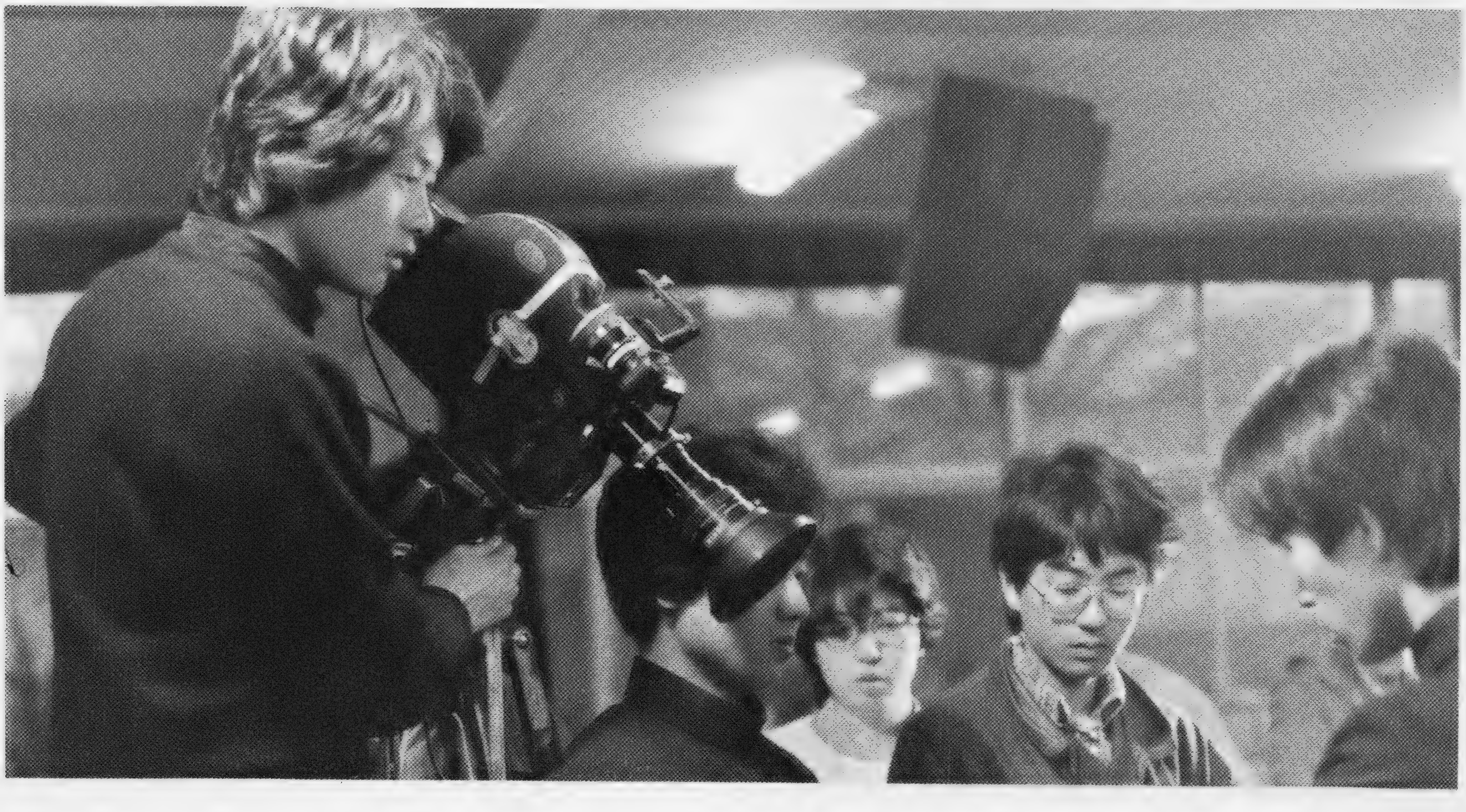
○3月30日
午前、ラストの待合室, 午後、夜の教室。
待合室のシーンは、窓バックの正面, 廊下バックの横位置, 診察室バックの切り返し, それぞれ成蹊内の違う場所で撮影して、編集の妙技で一つの場所に見せようという狙い。スクリプターにとっては大変なシーンだ。
撮影助手の某スタッフは、フィルムチェンジの際、生フィルム（400フィート）の缶に光を入れてしまい、フィルムはパア。でも撮影済みじゃなくてよかったね、桜井くん。
監督、昭雄がうつぶせになっているカットのスタンドインに入っているうちに寝てしまう。早朝から深夜までの撮影と打ち合わせのため、スタッフの間にも疲れがたまり始める。

○3月31日
午前中は、昭雄, 尾崎, 理沙の実験室その1。午後は、昭雄, 理沙の実験室その2。
この日のノルマは2シーンのみで、翌日の海ロケに備えて早めに解散。

○4月1日
am5：00新宿西口集合。也実嬢は、スタッフを思っておにぎりを持参。うれし涙は浜田プロデューサー。
am7：30茨城県・那覇湊着、セッティング開始。風が強く、大波。堤防に立つ神田, 有森はずぶ濡れ。正午には終了。

▲これがウワサの桜井くん

○4月2日
全日、立教ロケ（病院）。
スタッフの遅刻のため、撮影開始が遅れる。それまでなんとかこなしてきたスケジュールが、この日から押し始める。以降、要注意スタッフへのモーニングコールが始まる。
文芸坐の鈴木さんが現場を見学にみえる。プロデューサー、大いに緊張す。



構図に関してカメラマンと監督が真剣なディスカッションを重ねる。

○4月3日

午前、児童公園（吉祥寺）
午後、夜の林道（辻堂）

児童公園では、ジャングルジムごしに大クレーンを使ったカットを撮影。みしみし揺れるクレーンをその場にいるスタッフ全員で必死（付けているカメラは時価８００万円！）の思いで支える。

昼食後は一路、辻堂の海浜公園へ移動。夜の林道シーンを撮影後、江ノ電の鎌倉高校前駅での撮影。

（後日談）

某スタッフ「どうして、あの程度の林道を撮るのに、わざわざ辻堂まで行ったんですか？」
監督「いやあ、ああいう松林はなかなか無いんだよ。」
某スタッフ「ほんとうですかぁ？」

この日は帰宅が大変でした。

有森嬢の乗った車は、ナビゲーターの多聞の安易な判断のため、東京に向かうはずが、なぜか横須賀をめざしてしまう。有森宅に着いたは、午前2時。お疲れさまでした。

心優しい有森嬢は、ドライバーをつとめる浜田プロデューサーにリポビタンDを差し入れ。ところが、このリポビタンD、某スタッフの手を経て、翌朝にはなぜか監督の胃の中へ。この顚末は、“リポビタンD事件”として、のちのちまで事あるごとにスタッフの脳裏をよぎることとなる。他の誰が忘れようとも自分だけはこの恨み、忘れてなるものかという浜田プロデューサーの誓いは堅い。

○4月4日

今日は雨降り。撮休となる。

ようやく休みがとれてホッとする一方、スケジュールの押し具合も気になるところ。

○4月5日

全日、成城ロケ（自転車チェイス）。

監督、成城並木道で、どこぞの高貴なお家のお犬さまのウンチを踏みつける。熱中の度合がわかる一件。しかしバッチイ。

○4月6日

終日、成城ロケ（自転車チェイス）。

この日は、2台あったクラウンをうまく使うことによって、1台の車が走っているように見せるというカットを撮影。それと、道路のマンホールのなかから、車がカメラの上を走りぬけるというカットも撮影。

○4月7日

終日、実験室（成蹊高校）

６０人エキストラ第2弾！仕出し弁当も膨大な数をあらかじめ、近所の弁当屋に電話予約で注文という豪快ぶり。

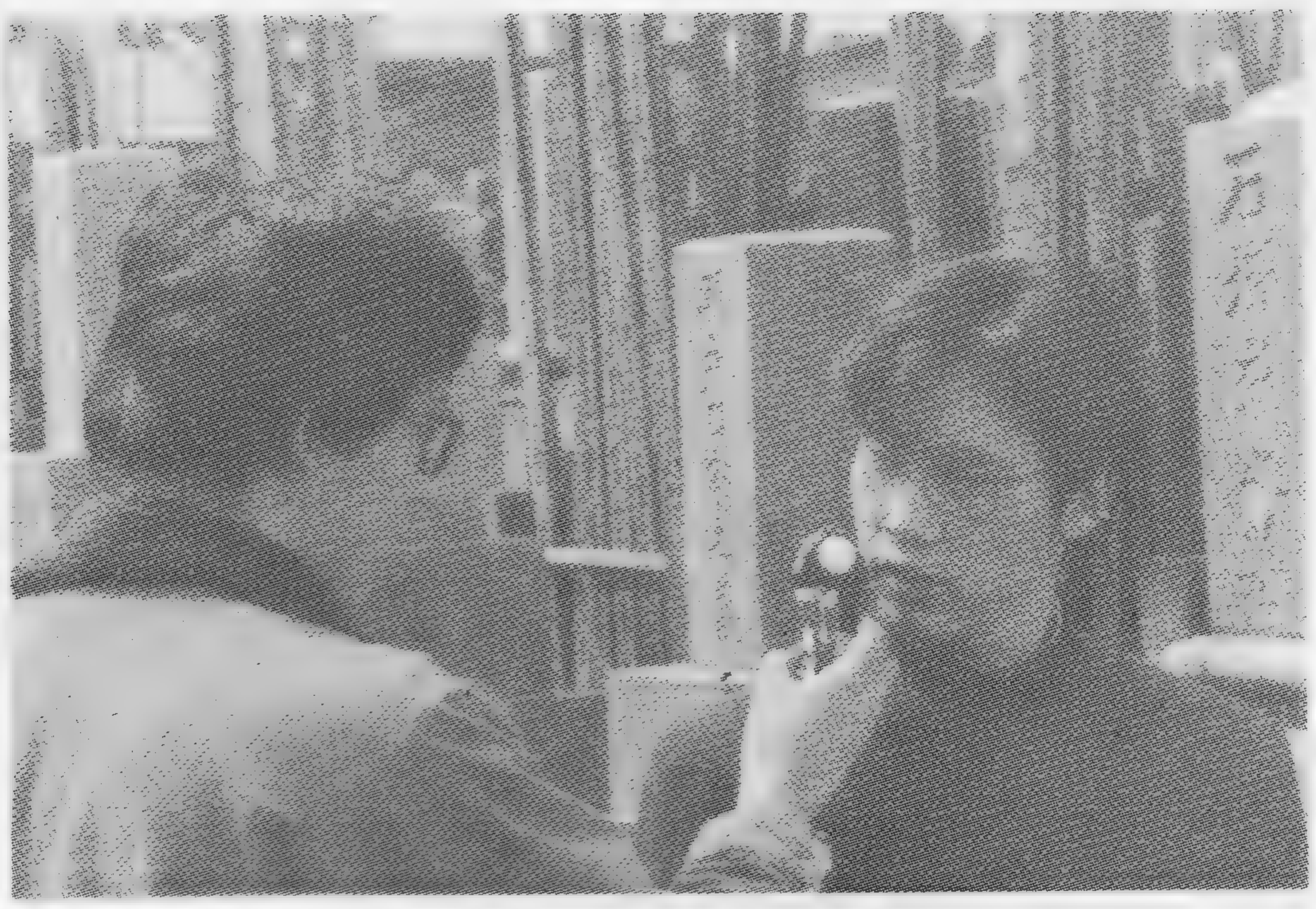
この日は、６０カットという無謀な計画がたてられていたが、やれば出来るもので、予定のカットはなんとかかんとかクリア。

連日のノリ弁当とシャケ弁当の交互攻撃で野菜不足、ビタミン不足の声も。イライラしないためにもビタミンは大切だ、という訳でビタミン剤を飲むスタッフも・・・

この朝、現場へ向かう車の中まで、クレーンの製作が続いた。特殊機材担当の河村はその日、徹夜開けのその足で会社へ向かった。

○4月8日
雨降り。よって撮休。

○4月9日
午前、成城ロケ（自転車チェイス）
午後、住宅街（祖師谷）
まりを転がすシーンを撮影。別になんていうことがなさそうだが、なかなかどうして、うまくまりが転がらない。テイク10にて、やっとOKサイン。



○4月10日
午前、墓地（桜上水）
午後、病院前（関東中央病院）
この日は、他の仕事で来れないカメラマンに代わり、監督自らカメラを回す。長回しの部分で尾崎役の関、緊張のため、NGを連発。思わず熱くなってしまった、とは監督の後日談。

○4月11日
終日、昭雄の家（小中家）
監督の部屋を妹・夏美の部屋に改装。

○4月12日
終日、商店街（吉祥寺サンロード）
この日は、冷たい4月の雨が降る、あいにくの悪天候。あまりの寒さに使いすてカイロが支給される。スタッフの中では、この日以降風邪をひく者が続出する。
撮影途中で、カメラに入っていたフィルムが既に終わっていることが判明。どのカットでフィルムが終わったかを計算するため、一旦撮影は中断。近くのゲームセンターに入って暖をとる。

転倒するエキストラを見て、通行中の買物おばさんに『大丈夫？ひどいわねえ』の同情の言葉をいただく一幕も。

立教ＳＰＰの先輩、黒沢清氏、偶然現場を通りがかったところをキャッチ。エキストラとして急拠出演。

○4月13日

午前、商店街のこり。

午後、尾崎の部屋（小中家）

撮影後、ラッシュを見ていると、原因不明の白い光が出現、リテイクかとスタッフは騒然となる。（後日、映写機のトラブルと判り一同ホッとする。）

▲スクリプターとたわむれる瓜生カメラマン

○4月14日

午前・午後、理沙の病室（立教大学）

夜、教室（成蹊大学）

この日はカメラマンのピンチヒッターとして日大芸術学部の後藤さん登場。

夕方成蹊に移動してからは、段取の悪さから撮影は押し押し。学校での教室使用は夜9時まで。しかも、スケジュール上の都合で他の日に撮り残すことも不可能。9時過ぎになっても撮り終わらない。しかし、校舎前での浜田プロデューサーの管理人さんへのごまかし工作の甲斐あって、教室内での撮影もからがら終了。

▲目を覚ます昭雄のアップはベッドを立てて撮影された。

○4月15日

午前、尾崎家・前（祖師谷）

午後、まりの少女リテイク（祖師谷）

東宝スタジオへレールを返却しに行く途中で、車から突然原因不明の煙が吹き出す。車はその場でオーバーホール。河村さん、ゴメンなさい。

○4月16日

午前、新宿駅ホーム

午後、信濃町駅ホーム，中央線車内

新宿駅のホームの撮影許可を交渉したのは助監督の中平。初め国鉄側は一時間の許可を与えたが、中平の泣きつき作戦によって、二時間に変更。

信濃町駅では、天皇を乗せた車がすぐ横の高速をお通りになるとのことで、その間は、一切撮影は禁止という一幕も。

新宿5：20発松本行きの列車の中で撮影。車内出レールを引きたいと監督が主張、スタッフ却下。

○4月17日

午前、尾崎，昭雄の電車無いシーン

午後、理沙の電車平行カット

午前中の撮影は新宿・三鷹間の総武線内で。何度もこの区間を往復。ゲリラ撮影。

午後は平行に走る列車内の理沙を撮るカット。原宿・渋谷間の山手線に有森と助監督の角田が乗り、トランシーバーで平行に走って撮影する車中と応信。なかなかタイミングが合わずに苦心。反対方向の列車が視界に入ってきたり、車の方が信号で止められたり、お互いのトランシーバーの応答の声がうまく聞きとれなかったり。

この日をもってスタッフは一旦解散。リテイクとスタジオ撮影を残して、３週間ほどの撮影を終了。

○5月9日
昼間、車チェイスリテイク。（成城）
夜、電話ボックスリテイク（立教）
上田と理沙の乗った車とカメラを乗せた車と二台でトランシーバーで交信しながら撮影していると、近くのハムマニアのおにーさんが飛んできて、昔の交信機は電波法改正になったから使用不可だと教えに来てくれた。
○5月12日
翌日のスタジオ撮影の準備で、夜はセットの建て込み。
○5月13日
全日、スタジオ撮影（スタジオR）
星空バックで人物へトラックアップするカットでは、人物を台車に乗せて移動させるため、（カメラは固定）ライティングが困難をきわめる。
この日になって、それまでの撮影では気の張りっぱなしだった監督も余裕が出てきて、星空のシーンの撮影時には、長年暖めていた構想が映像化されたという実感で感無量だったそうである。
○5月18日
河村による特製アダプターがようやく完成して、それを使った自転車チェイスカットを撮影。
○5月19日
前日の撮り残し分。これでほぼ撮影終了。監督は編集作業に本格的に入る。

〈ポスト・プロダクション〉

○7月1日
ル・ピリエにてオールラッシュ。ようやく映画の全貌が見え始める。スタッフから、テンポの悪い部分を指摘してもらう。
○7月2日
ラッシュを持って、小中、福島音響にて第一回音響打ち合わせ。
○7月24日
小中家にて、ビデオによるアフレコ練習始まる。
○7月28日
福島音響・新宿スタジオにてアフレコ一日目。上田の出番はみんな録り終えた。6時終了予定が、押して、8時過ぎ終了。
○7月29日
アフレコ二日目。午前中、堤防での理沙のセリフが難行。3時すぎ、理沙の出番終了。残りは昭雄と尾崎のみ。ジャングルジムの尾崎の長ゼリフがなかなか口が合わない。4時間半押しの10時半終了。神田、関はもうぐったり。
○8月3日
福島音響・渋谷スタジオにて、SEづけ一日目。R－2の電車のシーンに時間がかかる。
○8月4日
SE二日目。カーチェイスのシーンは、やたら音の切り換えが多いので時間がかかる。
○8月6日
編集の手直し。絵を切るとシネテープも同じだけ切らなくてはいけないので、けっこう時間がかかる。
○8月7日
SEの残り。
○8月10日
松山家にて生ピアノの曲・6曲録音。演奏木住野。
○8月12日
市ヶ谷のスタジオで生ドラムの録音。
○8月14日
ライン録りの楽器をすべて持ち込んで、音楽スタッフの森山家ごもりスタート。
○8月22日
福島音響・渋谷スタジオにて効果アフレコ。効果助手・西岡、足音、衣ずれなどを器用につけていく。

○8月29日
進藤、流星アニメのテスト原画を完成。ただちにリスフィルムに反転、撮影。
○9月7日
進藤、流星アニメ完成。同時進行で、斉藤、せっせとリスフィルムに反転。
○9月8日
森山家にて、特殊音響づくり。

○9月12日
小中家にてアニメ撮影開始。多重露光のため、3秒のカットに4時間以上かかる。
○9月14日
福島音響・新宿スタジオにてダビング準備。
画面に合わせてセリフ、効果、音楽を流して一通り見てみる。ジャングルジム、商店街、生徒が実験室に駆け込むシーン等で、予定していた音楽が合わないという意見がミキサーの福田から出る。夜、森山家にて急拠、追加曲を作る。
○9月15日
ダビング本番。音のバランス、効果・音楽の出しのタイミング、切るタイミングｅｔｃ、何度も変えてみながら、ディスカッションを重ねていく。全13ロール、ようやく終了したのが朝の3時。
○9月21日
ネガ編の岩佐編集室に、編集素材搬入。
○9月22日
岩佐編集室にて、エッジナンバーの整理。
○9月26日
流星アニメの撮影終了。
○9月30日
スケジュールの問題で、岩佐編集室より編集素材引き上げ、東洋現像所・編集センターの小宮編集室に搬入。
○10月4日
河村が製作したオプチカル・プリンターが小中家に搬入、ただちにセッティング開始。
○10月5日
ようやく明け方にセッティング完了、引き続きテスト撮影。この日より、角田・中平、小中家に泊まり込み。マスク作成開始。
○10月6日
終日かかって、約400枚のトラベリングマットのトレス終了。マスク原画は、鍬田・花岡その他に分担して渡され、オス・メスのマスクにする作業を依頼。
○10月7日
マスクがいらない全面ＯＬのカットから撮影開始。合成カットは全部で27カット。この日は7カット撮影。
○10月8日
マスクの一部が上がり、トラベリングマットの撮影も開始。夕方、前日のラッシュが上がる。露出がアンダーで、全カット、リテイク。一同、落ち込む。
○10月9日
連日のオプチカル作業。24時間体制で、かわりばんこに眠る。
○10月10日
撮影スタッフもマスク作成作業に参加して残りのマスクを仕上げる。引き続き、トラベリングマットの撮影。明け方までに一応、全カット終了。
○10月11日
夕方、前日のラッシュが上がる。3カットリテイクが出たが、ようやく終わりが見えてきたため、スタッフの顔は明るい。明け方までに3カット。
○10月12日
夕方、前日のラッシュ到着。リテイクなし。スタッフ一同、万歳三唱、記念写真を撮る。

○10月17日
ネガ編終了。
夜、ＯＭにて小中、瓜生、タイミング打ち合わせ。
○10月18日
ＰＣＬにネガ原版納入、タイミング打ち合わせ。
○10月21日
ＰＣＬにて初号検定試写。堤防のシーンでやや焼き込み過ぎの部分のリテイクを指示。
○10月22日
リテイク部分の試写。
○10月23日
リテイク部分をつなぎ替えた初号をＰＣＬから引き取る。ＰＭ1：00よりスタッフ、キャストを集めて、ル・ピリエにて完成披露試写。

試写室から――

パラレルワールドの赤い月

松田政男
(映画評論家)

酒落た異端の作風によって、早大シネ研と共に常に学生映画界の前衛でありつづけてきたパロディアス・ユニティーが集団活動を停止して以降、その母胎とも言うべき立教大学ＳＰＰが矢継早に送り出す新作群に私は必ずしも満足していなかった。新しいリーダーと目される小中和哉の高校以来の長いキャリアが逆に災いしてか、ＳＰＰ総体の作風もまた余りにもオーソドクスに安定し切っているかに見えたからである。だがしかし、その小中和哉が初めて１６㎜で撮った『星空のむこうの国』と出会うに及んで、私は私の思い込みを修正せざるをえなくなった。いかにも古風なボーイ・ミーツ・ガールの物語と見せかけて、小中和哉は主人公をパラレルワールドに大胆にも拉し去ることによって、凡百の前衛を超えてしまったのだ。美しい夜空に今しも昇る双つの赤い月こそ、あの『バック・トゥ・ザ・フューチャー』でさえ逃げの一手を打つしかなかったパラレルワールドの論理が、まさしく完璧な整合性によってのみ帰結しうることを示した記念すべき表徴である。小中和哉の突然変異に立ち会えて、私はいまハッピーな気分に浸っている。

スリリングな映画

大久保賢一
(映画評論家)

スリリングな映画だ。例えば、昭雄と理沙が駅のホームで触れあう場面は、あらかじめ「平行して走る」電車の、一方の車内からの距離として描かれている。その距離を、「触れあう」ところまで動かす画面の運動がスリリングなのだ。

むろん、この「平行して走る」電車は、いずれ尾崎によって語られる平行世界（パラレルワールド）そのもののイメージでもある。

圭子と美知が介在する下校時とアーケードの場面も、彼女たちを置くことで、「距離をつめる運動」を巧みにつくっている。

周到な脚本と撮影の技術がその運動を保証している。そして何よりも良いのは、様々な伏線（夜の教室での昭雄と理沙の会話がラストにどのようにつながるかを見られたい）とその効果が、「想い」という一点にしぼり込まれていることだ。「スリリング」とこの作品をいうのは、これが素晴らしく感情的な作品であるからなのだ。

新鋭監督の登場に拍手

村木良彦
(テレビマンユニオン代表取締役)

「星空のむこうの国」は、日常の世界とＳＦの世界とを奇妙に交錯させた新鮮な映像が印象的である。監督はメディア・ワークショップ塾生の小中和哉２２才。パラレル・ワールドを映像で描くという難しいテーマに、大胆にみずみずしい感覚で取り組んだスタッフたちの息づかいが、スクリーンから聞こえてくるような作品だ。

これからが楽しみな、新鋭監督の登場に拍手を贈りたい。

映像のエイリアン出現！

大山勝美
(ＴＢＳプロデューサー)

ひとりの映像のエイリアンが現れた。小中和哉君である。彼が高校生のときつくったアニメ映画を見たが、リリカルな詩情にあふれ、とても新人第１作とは思えなかった。

この「星空のむこうの国」は、これまでの小中映画の集大成である。繊細にしてダイナミック、流麗にしてスピーディー。映像を自在にあやつり、独特のファンタジーをつくりあげて見事だ。

瞠目すべき「映像の詩人」の誕生である。

懐かしき少年ドラマシリーズの復活　　　　　　　　　　野々村文宏
（テクノ・コラムニスト）

タカラのサイボーグ１号や、金のくちばし１口銀のくちばし５口でおもちゃの缶詰めがあたる森永チョコボールなどと一緒に、僕らが記憶の引き出しの忘れ物の箱に入れているものに、少年ドラマシリーズと夢でしか遭えない部類の美少女があります。

小中和哉君のリリカルな眼が、ふつうの人ならもうとっくに忘れているこの２つのポエティックなアイテムをフィルムの中で遭遇させました。

懐古物については一言家のある私ですが、ただ懐かしさを競うだけの“記憶の薬物中毒”的な懐古ブーム便乗商品としてではなく、決して流行に左右されない“定番商品”としての微熱めいた映像を、オリジナルの感性で紡ぎあげた記憶のデザイナー、小中和哉の近未来過去主義的（パスト・フューチャリズム）な感覚は、憎らしいけどかっこいいと思っています。

そして、この映画がきっかけとなって、次回作のためにぽーんと５億円ぐらいを小中君にあずけてしまう、永野会長や中江滋樹やグリコ森永犯みたいなビッグな人たちが現れてくれることを、７６年に１回やってくるハレーすい星さんにお願いしているのです。

純粋の愛の高まりを二つの世界に映像化　　　　　　　　　　志賀信夫
（放送評論家）

交通事故で意識を失い、あまり長い間ではなかったが、あの世を訪ねてきた体験を持っているだけに、「星空のむこうの国」という作品にたいへんひかれた。現世とあの世とが本当にあるような気がするし、「パラレルワールド」に迷い込む可能性もあると想像するからだ。

そんな理屈はともかく、この映画は純粋の愛の高まりが何よりも強いものであることを見事に強調した作品であり、若者らしい清潔さでストレートに表現されているところがなんといっても魅力的だ。甘さ、ロマンティックさ、素直さが新鮮に表現されているため、私たち大人は青春時代を思い起こされ、若き日へのノスタルジーを感ずる。

二つの世界の映像化に成功しており、映像表現が新鮮だ。カメラ・ワークが大胆、編集もユニーク、イメージの世界を具体的な映像にそのまま移し変えていた。しかも、全体のまとまりがよく、説得力も持っていた。

新鋭小中和哉監督の映像表現力には今後を期待させるものがある。ヒロイン有森也実の清純な美しさ、ヒーロー神田裕司の甘いマスクは、この少年ドラマに合致していた。若者も大人も楽しめるラブ・ロマンといえよう。

MW メディア・ワークショップ
＊昭和６１年度　募集要項＊

１）応募締切
昭和６１年4月１０日（木）午後5時

２）カリキュラム

コース名	内容	曜日
ディレクターコース（定員30名）	ビデオ系を中心とした新しいドラマ表現の新しい担い手たちを育てようとするコースです。カリキュキュラムはドラマ表現の基礎から実践までを現場第一主義で組み立てます。カリキュラム担当：大山勝美	週２回 月曜・水曜 18:45 － 20:30
ＣＧハイテク映像研究コース（定員30名）	コンピューターを中心とした新しい映像製作ツール及びメディアの利用法を研究し、巾広い表現方法を求める映像・音響制作者を養成します。カリキュラム担当：金子　満／加藤　圓	週２回 水曜・金曜 18:45 － 20:30
ソフト開発研究コース（定員30名）	ＣＡＴＶ、衛星放送、ハイビジョン、これから続々と登場してくるニューメディアのソフトをいかにクリエイトし、プロデュースするか、に焦点をあてたカリキュラムを編成します。カリキュラム担当：村木良彦	週２回 月曜・金曜 18:45 － 20:30

３）お問い合わせ
メディア・ワークショップ　℡０３（４７７）１６８１
〒１５０　東京都　渋谷区　宇田川町４１－８
（渋谷ビデオスタジオ内）

有森也実インタビュー

「ローマの休日」を観て
女優に憧れる

――まずは一般的な質問から。女優さんには昔からなりたいと思っていたの？
也実：みんなが抱く一般的な憧れはありましたけど。小学校３年の時に「ローマの休日」を観たんです。
――テレビで？
也実：ええ。それでオードリー・ヘップバーンにすごく憧れたんです。
――女優になったきっかけは？
也実：ＭＣシスターというファッション雑誌のモデルに応募したら、受かってしまったことです。それで１年くらいモデルをやってたら、「中卒東大一直線もう高校はいらない」のお話が来て。

若いスタッフたちとの３週間

――撮影期間の３週間はどうでしたか？
也実：長かったです。（笑）
――スタッフとかキャストの人のほとんどが新人だったでしょ。プロの人たちと比べていろんな点で至らない所もあったと思いますが、また違った雰囲気もあったんじゃないかとも思うんですが、どうでした？
也実：みんな若いんで言いたいことも言えたって感じで、なんか一つになってやったっていう感じがしました。みんな一生懸命やってたし、私も映画でヒロインって初めてだったし。
――理沙という役をやってみての感想は？
也実：死ぬっていう役は初めてだったんですよね。（笑）最後はさわやかな顔っていうか、幸せそうな顔をして死にたいな、とは思っていました。
――監督さんの印象は？
也実：撮影の時、いつも同じ電車で来るんですよ。だから安心するんです。朝来ると、寒いでしょ。で、一人で電車乗ってて監督に会うと、あぁよかったって。
――怖い存在じゃなかったっていうことですね。監督っていうのは普通だとどっちかっていうと怖い存在なんだけど。（笑）共演者の印象は？

也実：神田くんはよく教えてくれましたよ。あの長ゼリフのところ、すごく不安だったんですよ。目の動きとか、倒れる時ちょっと目を上げてごらんとか。関くんはすごくリラックスさせてくれる存在でした。（笑）関くんと神田くんと二人でいると、すごくにぎやかで楽しくなっちゃう。（笑）

アフレコに苦心

――大変だったシーンは？
也実：実験室でお医者さんを呼びに行こうっていう所で、いかないでっていうところで手をつかむタイミングが難しかったです。あと倒れ間際のセリフですーっと息が抜けるところとか。
――教室のところとかは？
也実：あれはアフレコが大変でした！（笑）
――アフレコは初めて？
也実：初めて。画面を見てると、とんでもないところでセリフを切ったりしているんですよね。アフレコの時に何でこんなとこで切ってるんだろうとか思って。

完成作品を観て

――出来上がった作品を観てどうでした？まず、主演女優として。
也実：わぁ（笑）。えーと、とても素直な女の子になっていたのでよかったと思います。病気で今にも倒れそうで、あんまりにも可愛そうっていうの、あんまりなかったでしょう？そこらへんが私は好きでしたね。
――反省してる点とかは？
也実：昭雄くんに会いにやって来るでしょう、昭雄くんの家の前で歩いて来るあの顔が納得出来なくて。ボーッとして歩いて来るでしょ（笑）。
――あれは演出のミスだよなぁ。好きなシーンは？
也実：商店街で、「あら忘れちゃったの？港の灯台へ行こうって・・・」というところがさわやかでよかったです。あそこが元気な理沙が出てて好きなんです。もちろん、最後も元気いっぱいでしたけど。
――今度は普通の女の子としてこの映画を観ると、どうですか？
也実：私だったら言えないようなセリフがいっぱい出てくるでしょう？でもそれは、理沙ちゃんが素直になって、もうすぐ死んじゃうっていうこともあったから言えたんだろうけど、今の女の子ってああいうの少ないじゃない？素直に自分の気持を表現するっていうのが。どうしても意地張っちゃったりとか、反対のこと言っちゃったりとかして。素直な女の子って素敵だなあって思いましたね。
――撮影の失敗談とかあります？
也実：海行った時に神田くんが塩だらけになっちゃったこととか（笑）。
――也実ちゃんは大丈夫だったの？
也実：私は足をちょっと濡らしたけど、うまかったんですよ。波をよけるのが（笑）。

初恋は小学校１年

――ところで、この映画に出てくるような運命的な出会いがあると信じます？
也実：あってほしいと思います。
――也実ちゃんの初恋はいつ頃だったの？
也実：初恋は小学校１年の時。初めてバレンタインでチョコレートをあげたんですよ。でもそのあげるっていうのが可笑しくて、私のとっても仲のいいお友達もやっぱりその男の子のことが好きで、二人で一緒にチョコレートを買いに行って、順番こに「ちょっと待ってて」と言ってハイって渡してきて、「ああよかったね」って言ったんですよ（笑）。
――それは小学校１年だからね（笑）。高校生くらいだったら血をみるけど（笑）。

（１２月１６日　渋谷ロロにて）

パラレルワールドとは？

文：小林弘利

パラレル・ワールドを扱った映画の系譜について何か書いてくれ、と頼まれたのですがこういう大雑把なテーマを与えられるとたいへん困ってしまいます。

パラレル・ワールド、というのは元来、時間テーマＳＦの究極の問題点『親殺しのパラドックス』を解決するためにこそ生まれた概念だと思います。

例のタイムマシンで過去に戻って、自分の親を殺したらどうなるか、というアレです。

自分の親を殺してしまったら、当然自分は生まれない訳だから、生まれなかった自分がタイムマシンなどを作れる訳はない。しかし、自分はいま正にタイムマシンに乗って両親を殺しに行こうとしている。

この矛盾をどう解決すればいいのでしょうか。これは絶対に答えの出ないナゾナゾです

自分と親、というと何か話がややこしくなるから、もっと簡単な設問を作ってみましょうか。

タイムマシンが一台とそれに乗って過去へ戻ろうと思っている男がひとりいます。

彼は過去に戻る前に傍にあった桜の木に自分の名前を書きつけました。

そして彼はタイムマシンに乗って過去に戻り、名前を書いた木と同じ木を斧で切り倒してしまいます。

で、再び現在に戻って来て、名前を書いた木に近づいて行きます。はたして彼は自分が過去に戻って切り倒した木をみつける事ができるでしょうか。

――やっぱり答えは出ませんよね。

そこでパラレル・ワールドの出番です。

パラレル・ワールド、平行世界。または並列宇宙。自分たちが生活しているこの世界の他にも同じ時間軸の上に無数の宇宙が平行して存在しているという考え方。

ひとつひとつの世界はそれぞれに独立していて、考えられる限り無数の世界が存在するけれど、それでも隣り合うその世界は大変似通ってはいるけれど決して同一ではないので、少しづつ、世界と世界の間にズレが生じている。

これがいわゆるパラレル・ワールドという奴です。で、その非常に似通ってはいるけれど、決して同一ではない世界が我々の存在している世界と無数に平行して存在しているということを考えるとタイム・パラドックスは一挙に解決してしまう訳です。

パラレル・ワールドという概念さえ用いれば『親殺しのパラドックス』も別に頭を悩ませる必要はなくなってしまいます。

タイムマシンに乗ってでかけて行った過去の世界というものはもうひとつの非常によく似た世界である訳です。だから彼は自分の親を殺すこともできる。その世界ではその時点で彼の存在も消滅してしまいますが、それはあくまで隣の世界の彼であってタイムマシンに乗って未来からやって来た彼ではない。

だからかれはそのまま再び元の世界に帰ってくることができるわけです。

例の木に傷をつける話にしても同じ事で、木に傷をつけた世界と傷をつけられる前に切り倒されてしまった木のある世界とは別のものな訳です。ようするに木は二本あるという事。

こういう風にパラドックスを解決する手段としてパラレル・ワールドが発見されたのですから、そのパラレル・ワールドを扱った映画の系譜などという物を書こうとするといままで作られてきたすべてのタイム・トラベル物の映画について書かなくてはならなくなってしまいます。

『タイム・マシン』も『猿の惑星』も『ファイナル・カウントダウン』もみんなそうです。新しいところでは『バック・トゥ・ザ・フューチャー』には三つのパラレル・ワールドが登場していますね。

そんな訳で、大雑把な設問に大雑把に答えてみました。

もっと詳しくパラレル・ワールドの事について知りたいな、という方がもしいらっしゃったなら、その方には広瀬正さんの作品をお読みになることをお薦めします。

とってもややこしくて、とってもおもしろいタイムマシン物、パラレル・ワールド物のお話に出会えるはずです。

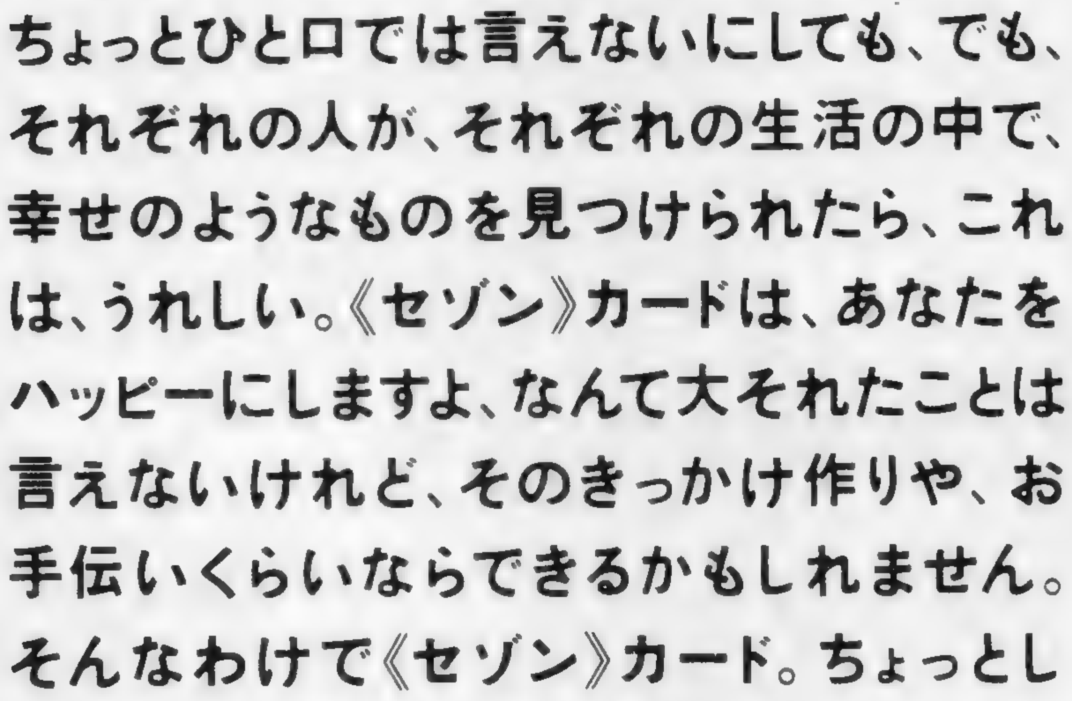
だけど、幸せには、かないません。

どんなにリッチな人も、どんなに立派な人も、どんなに有名な人も、やっぱり幸せにはかなわないみたいです。何が幸せかなんて、ちょっとひと口では言えないにしても、でも、それぞれの人が、それぞれの生活の中で、幸せのようなものを見つけられたら、これは、うれしい。《セゾン》カードは、あなたをハッピーにしますよ、なんて大それたことは言えないけれど、そのきっかけ作りや、お手伝いくらいならできるかもしれません。そんなわけで《セゾン》カード。ちょっとした幸せの、お役に立てたらうれしいです。

新会員募集中。お気軽にどうぞ。

○お申し込みには＝銀行預金通帳とお届出印、ご本人を証明するもの(免許証、保険証、学生証など)をお持ちください。○18歳以上で電話連絡可能な方なら、お申し込みいただけます。※カード発行の際、多少お時間をいただく場合や、審査によりお申し込みの意に添えない場合がございますので、あらかじめご了承ください。※20歳未満の方は、ご両親のご了承が必要です。

カードは、《セゾン》。



西武セゾングループ

SEIBU 西武　SEIYU 西友　ミドリヤ MIDORIYA 西武クレジット　ams 西武　PARCO

drawing : Jonathan Borofsky©

「少年ドラマシリーズ」とは？

ＮＨＫ総合テレビで、夕方６時から放映していたテレビシリーズ。ＳＦから純文学までジュブナイルものを巾広く映像化して、当時の中高生に絶大なる人気を誇っていた。

特に、筒井康隆，眉村卓，光瀬龍などの作品う映像化したＳＦものは人気が高く、日本でＳＦと呼ぶことのできる、数少ないテレビシリーズとして、現在でも高い評価を得ている。

主人公は常に平凡な中高生で、何気ない日常世界から、次第にＳＦワールドに引きずりこまれていくというのが、毎回のパターン。ほとんどロケを行なわず、全てをセットの中で撮影した（ビデオ撮り）、その作りものっぽい独特の感覚が、また魅力の一つだった。

〈ＳＦ作品リスト〉

◇『タイム・トラベラー』（７２年1月1日〜2月5日）
原作：筒井康隆「時をかける少女」　脚本：石山透　出演：浅野真弓

◇『続タイム・トラベラー』（７２年１１月４日〜１２月２日）
脚本：石山透　出演：浅野真弓，木下清

◇『暁はただ銀色』（７３年４月２日〜４月１１日）
原作：光瀬龍　脚本：岩間芳樹　出演：テレサ野田，山田隆夫

◇『気まぐれ指数』（７３年４月１６日〜４月２５日）
原作：星新一　脚本：山元清多　出演：丹羽政孝，藤村有弘

◇『夕ばえ作戦』（７４年１月１４日〜１月２３日）
原作：光瀬龍　脚本：石松愛弘　出演：山田隆夫，今村良樹

◇『まぼろしのペンフレンド』（７４年４月１５日〜５月１日）
原作：眉村卓　脚本：岩間芳樹　出演：山賀裕二，池上季実子

◇『ユタとふしぎな仲間たち』（７４年５月６日〜５月８日）
原作：三浦哲郎　脚本：早坂暁　出演：熊谷俊哉，殿山泰司

◇『赤外音楽』（７５年４月７日〜４月１６日）
原作：佐野洋　脚本：鎌田敏夫　出演：門間利夫，天本英世

◇『なぞの転校生』（７５年１１月１７日〜１２月３日）
原作：眉村卓　脚本：山根優一郎　出演：高木浩幸，岡田可愛

◇『明日への追跡』（７６年５月１０日〜５月２７日）
原作：眉村卓　脚本：山根優一郎　出演：長谷川諭，斉藤友子

◇『１１人いる！』（７７年1月2日）
原作：萩尾望都　脚本：佐々木守　出演：山城はるか

◇『未来からの挑戦』（７７年１月１０日〜２月１１日）
原作：眉村卓「ねらわれた学園」「地獄の才能」　脚本：田波靖男
出演：熊谷俊哉，阪本真澄，テレサ野田

◇『幕末未来人』（７７年９月５日〜９月２９日）
原作：眉村卓「名残の雪」　出演：沢村正一，古手川祐子

◇『その町を消せ』（７８年１月３０日〜２月２３日）
原作：眉村卓「消えた町」「その花を見るな！」　脚本：山根優一郎

◇『七瀬ふたたび』（７９年８月６日〜８月１８日）
原作：筒井康隆　脚本：石堂淑朗　出演：多岐川裕美

文芸坐製作映画の歩み

文芸坐支配人　　鈴木　一

『夏子と、長いお別れ』の製作の時は、<名画座が映画製作にのりだす！>という活字が新聞・雑誌をかなり賑わし、我々も面食らったものだ。実は、当時『オレンジロード急行』を撮った大森一樹監督の作品集を企画していて、『暗くなるまで待てない』と『オレンジロード急行』二本立てでは、ちょっと新味がない、じゃあ一本撮ってもらおう、ということになった。前年『暗くなるまで待てない』の東京初上映が文芸地下で行われ成功を収め、その年の映画評論のアンケートで来年最も期待する人は？の問に、文芸坐として躊躇なく“大森一樹”と書いた。そのとおり大森一樹氏は翌年、城戸賞を受賞、商業映画『オレンジロード急行』を松竹で監督。我々の期待が違わなかったことに我文芸坐も小躍りした、という背景があった。

そのあと上板東映の小林支配人製作による『狂い咲きサンダーロード』並木座小泉支配人製作の『戦争の犬たち』も映画界進出と騒がれたが、どちらも個人の出資で立派に商業映画を目指していた。初めから、その性格は違っていた。

『夏子と、長いお別れ』を作ったこと、その作品が習作的（＝ペイすることが難しい）であったことが、その後の文芸坐製作作品の方向を決めた。もちろん、文芸坐が出せる金額にも限度がある。興行的に成功する作品を産み出すには、それなりに資本の投入が必要なのだ。それは、ある程度の宣伝費を掛けるか、極端に製作費を切り詰めるか、どちらかであろう。前者はかなりのリスクを覚悟しなくてはいけない。下記のリストのうち『星空のむこうの国』と製作協力作品を除いて、ペイしたのは二十数万円であがった『闇打つ心臓』一本である。ただ、この『闇打つ心臓』は横浜映画祭の自主製作映画賞を受賞し、ロンドン映画祭・エジンバラ映画祭で上映されるという栄誉を受けた。その縁でフィルムを持ってロンドン映画祭へ行った長崎俊一監督が、ロンドンで撮影した『ＬＯＮＤＯＮ　ＣＡＬＬＩＮＧ』を作り、この作品もまたロンドン映画祭で上映された。また、『ＭＩＬＫ○ＭＩＬＫ』の今関あきよし監督は、この作品がきっかけとなって『アイコ十六歳』で監督デビューした。

『星空のむこうの国』はこれまでの作品群とは、あきらかに違っている。何が違っているのかというと、小中和哉が主宰するパラレル・ワールドと提携した製作体制で、１６ミリというメディアの中での商業映画を目指している点である。スタッフ・キャストの方々にはかなりの無理と迷惑を懸けたと思うが、これが成功すれば、次の段階に進める気がする。

はずみで作ってしまった第一回作品当時も今も映画界の状況は、変わっていない。むしろ、若い映画作家達にとっては悪くなっているかもしれない（新人がでにくいという点で）。そんな中で文芸坐は習作の場の提供を続けていきたいし、生意気な言い方をすれば、新しい人材の発掘と育成のお手伝いをしていきたい。

最後に『星空のむこうの国』をこんなに素敵な映画に仕上げてくれた小中和哉監督、スタッフ、キャストの皆さん、感謝しています。

文芸坐製作映画作品リスト

- 夏子と、長いお別れ（’７８）　大森一樹　１６ミリ
- アナザ・サイド（’７９）　山川直人　〔製作協力〕　１６ミリ
- ＭＩＬＫ○ＭＩＬＫ（’８１）　今関あきよし　８ミリ
- 夏が、いっぱい物語（’８１）　犬童一心　８ミリ
- 闇打つ心臓（’８２）　長崎俊一　８ミリ
- ＬＯＮＤＯＮ　ＣＡＬＬＩＮＧ（’８５）　長崎俊一　１６ミリ
- 血風ロック（’８５）　流山児祥　〔製作協力〕　１６ミリ
- 星空のむこうの国（’８６）　小中和哉　１６ミリ

「星空のむこうの国」で使われた特殊機材

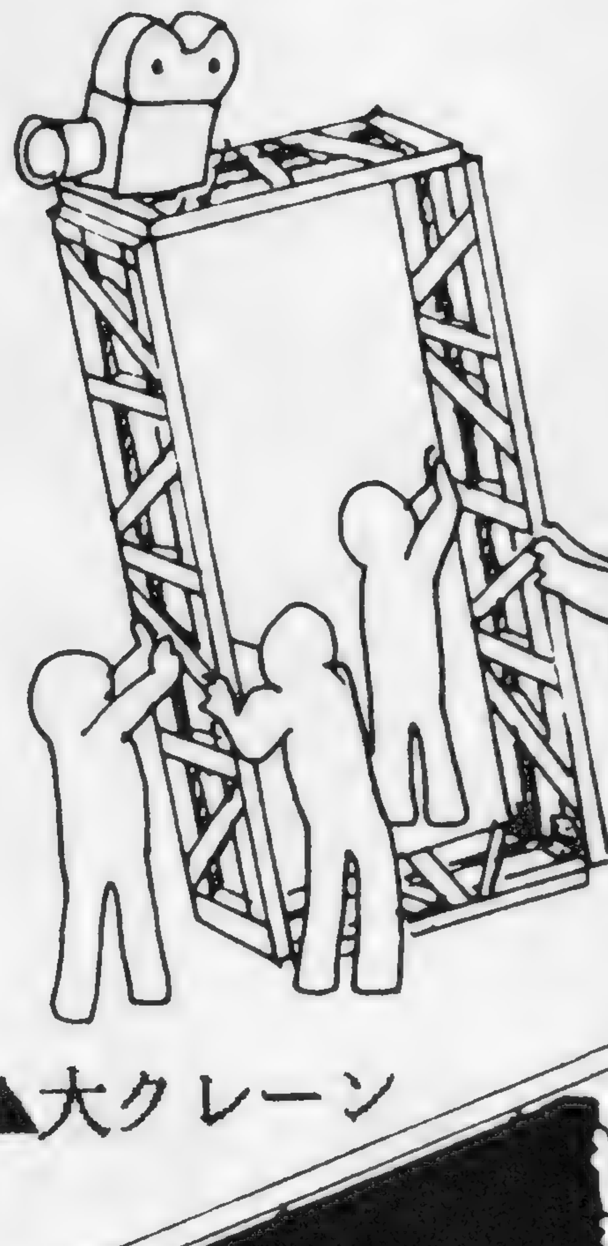
①ミニクレーン（設計・製作：河村豊）
立てればクレーン、横にすればレールになる。支柱を置けるスペースがあれば、どんな所でも立てられるので、狭い部屋の中でも使用可能。
クレーンとしては、昭雄の肩ごしから足なめまでダウンするまりが転がってくるショット，昭雄が自分の部屋で電話をしているのをフカンからじりじりと下がってくるショット，教室でクレーンダウンしながら机上の花がフレームインしてくるショット等で使われている。
カメラを同じ位の重さのおもりとワイヤーでつなげて、滑車で吊るすという、エレベーターと同じ原理。手動でも動かせるが、撮影の後半、モーター駆動アダプターが完成。
まりの主観で、カメラがトラックアップしながら昭雄の体を突き抜けるショットは、このクレーンを横にして、昭雄のトラックアップと、昭雄のいない風景だけのトラックアップをそれぞれモーター駆動で撮って、あとで、人物部分のみカラーになるようなマスクを切って、オーバーラップをかけたものである。

▲ミニ・クレーン

▲ミニ・クレーンを車に取り付けた所

②大クレーン（設計：河村豊　製作：高岡淳夫）
高さ約4メートル。タテ長の平行四辺形の四スミがチョウつがいでつながっていて、上の一辺にカメラ、それと平行している下の辺を地面にそれぞれ固定して、その平行四辺形を立てたり倒したりすることによってクレーン効果を出すという原理。
木造にしたため、撮影にあたっては、その場にいたスタッフ全員が支えたものの、板のたわみはどうしようもなく、かなり揺れた画面になってしまった。ジャングルジムの上からダウンしてくる1カットのみ使用。

③車取り付け用アダプター（設計・製作：河村豊）
車の前後のバンパーに取り付けて、超ローアングルでトラックアップ・バックが撮影できるアダプター。通常のシーンではアリフレックスＳＲを使用していたが、この撮影には、振動に強いアリフレックスＳＴを使用。ファインダーには小型のビデオカメラを固定して車内でモニターできるようにした。また、シャッターも長いコードを使用して、車内から操作できるようになっている。


▲大クレーン

④人物回転台・星空カーテン（設計：河村豊　製作：角田亮）
堤防のシーンで、星空をバックに、昭雄と理沙のまわりを３６０度カメラがまわりこむように見せるカットは、スタジオの中でカメラを３６０度動かすことは照明のセッティング上不可能なので、カメラは固定して人物の方を回転、それに合わせてバックの星空をスライドさせていくという方式をとった。
人物を回転させる台は、合板を二枚重ね合わせてまん中に軸を立て、二枚の間には車輪を付けて回転できるようにしたものを、三人のスタッフが手動で回した。
星空カーテンは、１ｍ×５ｍの星空ホリゾント（アルミの骨組みに黒ラシャを貼って穴を開けて、裏からトレペを貼ったもの）を、１０ｍのカーテンレールに付けたものである。
さらに、理沙のアップから昭雄こみのサイズまでトラックバックしてから回転し始めるというコンテであったため、回転台は台車の上に乗せられ、カメラとホリゾントの間を移動できるようにした。
この回転台は、昭雄と尾崎が電話をしているシーンの中でも使用された。

▲星空カーテン

⑤オプチカル・プリンター（設計・製作：河村豊）

文：河村豊

オプチカルプリントする場合、１６㎜映画であってもその部分だけは３５㎜で撮影するか、１６㎜をブローアップしておこなう。これは画質の劣化を少しでも抑えるためでもあり、また日本に於いて１６㎜のオプチカルプリント作業をする所が非常に少ないためでもある。今回の場合、どちらの方法をとるにせよ企業ベースのラボでは、オプチカル予算２０万円では所詮無理である。（いろいろ現像所を廻ってみて最善を尽くしたけれど無理と言われた）

またこの映画の場合、非常に高度なオプチカルプリンティング作業の一つであるブルーマットでも無理なショットが多く含まれているために、ロトスコープによる手書きトラベリングマットが必要になった。（だから小中君の映画はスタッフ泣かせなんだぶつぶつ・・・）こうなったらオプチカルプリンターを作るしかないと監督は考えたらしい。この映画の話を聞いた時、イヤな予感がして「オプチカルプリンターなんて作れないよ」と小中君に話したのに、クランクインをした頃には簡易型オプチカルプリンターを作ることになっていて、クランクアップする頃似はトラベリングマットできるオプチカルプリンターを作ることに決まっていた。どうなっているんだー！

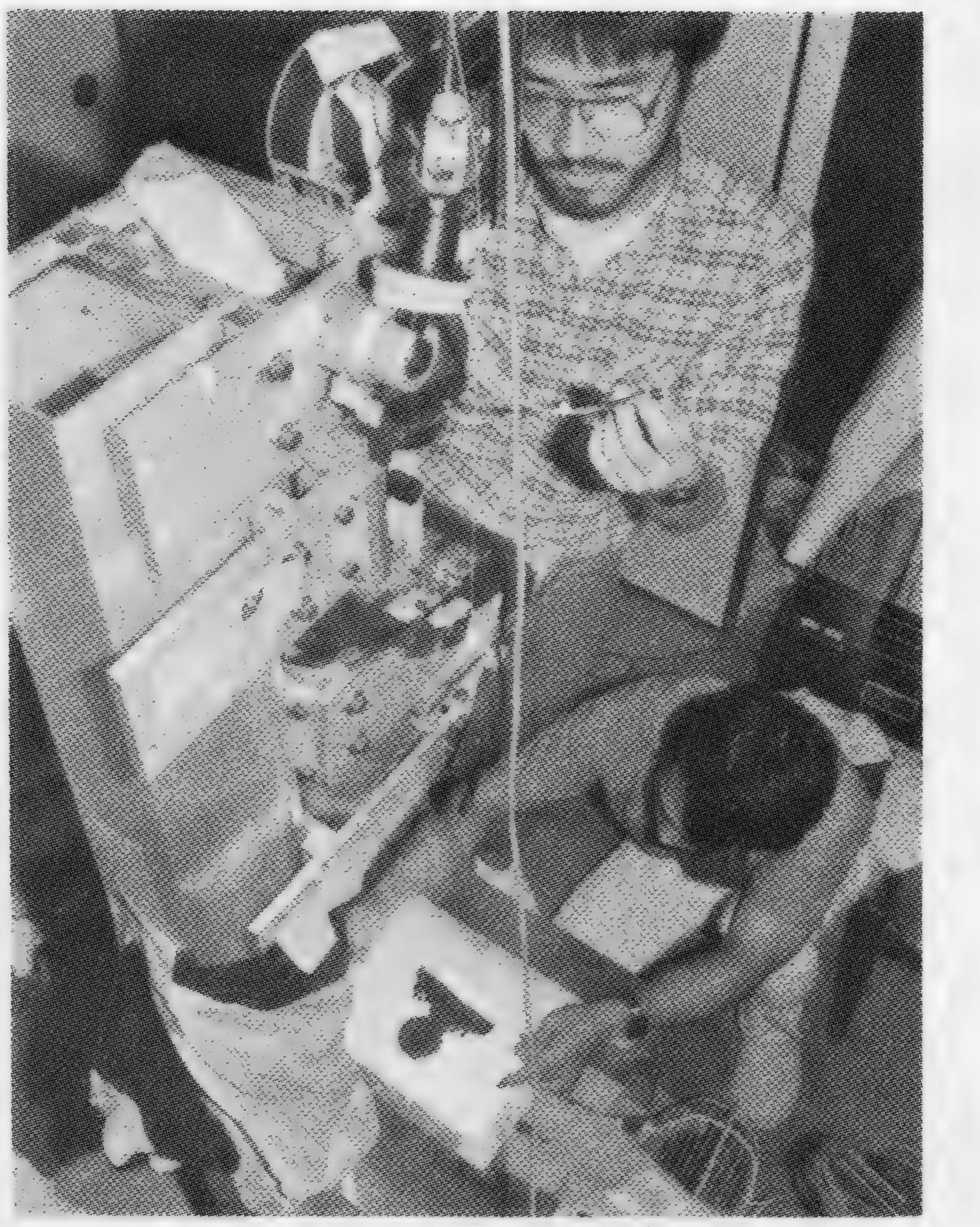
まあ作ると決まったら（かってに）いいものを作るしかない。そこで考えたのが図1のような方式のプリンターです。この方式は、マスターポジを使ってデュープネガを作る、もしくはＣＲＩを使うため、さらに二つのレンズのうちはじめのレンズでのみ素材の像をプリントするため、光学系による画質の劣化が少ないという特徴を持つ。

またロトスコープをする場合、従来のエリアルイメージプリンターで行う投影像を直接トレスする方法以外に、ＴＶモニターを見ながらトレースする機能が付いているため、明るい室内で行うことができる。

この方式の原理はエリアルイメージプリンターを逆にしたようなもので、図1のようにこのプリンターは二つの焦点面を持つ。第一の焦点は素材フィルム上にあるため、カメラに像を結ぶことができる。また、この光源であるライトボックスのマスクウィンドーにも焦点があるため、この部分にアニメセルを置き、光源をマスクすることにより、ロトスコープ・トラベリングマットプロセスが可能となる。

今回は現実の世界から分離されるような感覚を出すために、わざとマットの線を粗削りな感じにして、さらに違和感を出すために、カットによっては2コマ打ち，3コマ打ちのマスクにして、カクカクした感じを出してみました。

しかし、今回は時間的制約がきつかったため、光軸調整・フレーミング調整の充分な時間がとれなかったり、ＣＲＩのフィルムを手配できなかったために、像がいま一つシャープでなかったのは残念です。



▲プリンター本体

▲ＴＶモニター

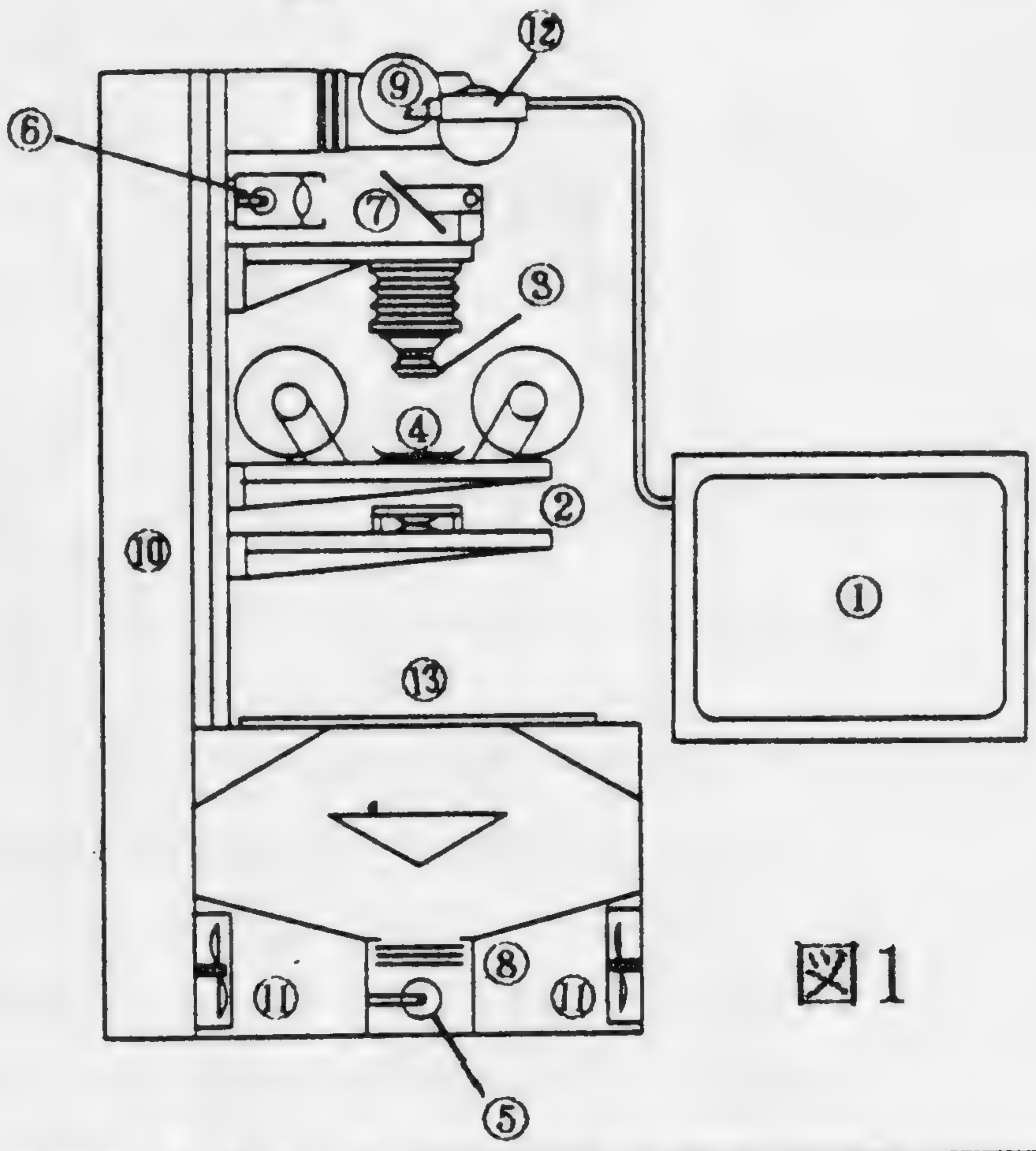


図1

1	高解像度モニター	8	カラーバランサー
2	リレーレンズ	9	シネカメラ
3	マクロレンズ	10	スライドテーブル
4	フィルムゲート	11	冷却ファン
5	ハロゲンランプ	12	超小型CCD TVカメラ
6	ハロゲンランプ	13	マスクウインドー
7	ダイクロックミラー		

これらのクレーン，オプチカル・プリンター等のレンタル、その他のお問い合わせは、
CANET（河村豊）
〒272　市川市　八幡　6－6－22
（0473）35－6981
まで！

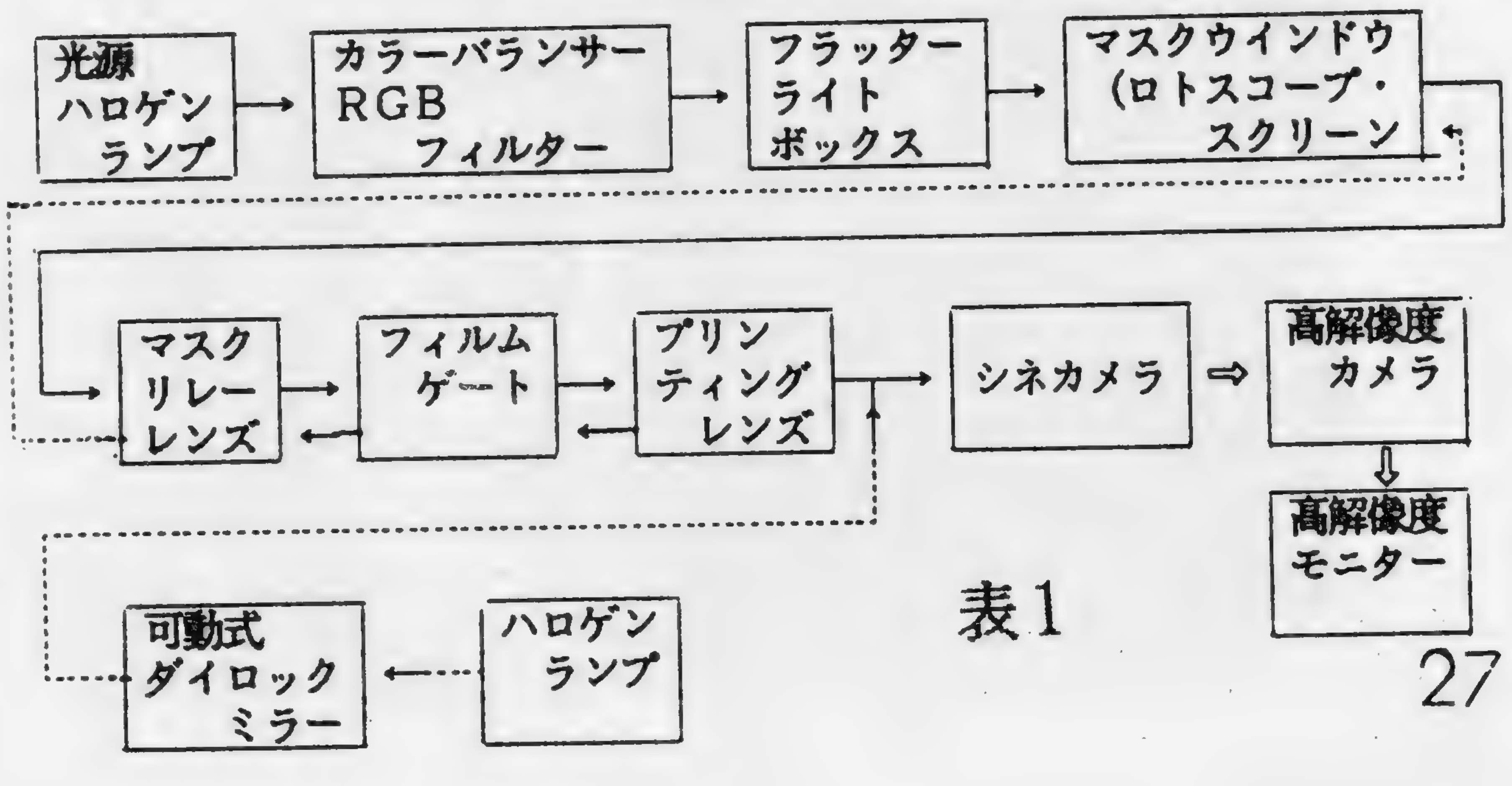


表1

MUSiC

文：森山繁

小中映画の音楽を一手に引き受けた村井俊夫君と、映画音楽制作は初めてというキーボード・プレイヤーの木住野佳子さんのコンビにより、今回の映画を盛り上げてくれる音楽を完成することが出来ました。今回、小中監督の「クラシカルでシンプルな曲」という要望に対し、クラシックからジャズまで幅広いレパートリーを持つ木住野さんの参加はとても重要であり、村井君のポップな曲に加えて、シンセサイザー群を駆使した厚みのあるゆったりとした曲を制作することが出来たのです。

今回の音楽制作にあたっては、やはり時間と制作費の少なさ故にほとんどが丸茂スタジオという6畳ほどのせまい部屋でひしめき合いながら録音することになりました。（ちなみにシンセサイザーは最高で7台も持ち込むことになった。）

§グランドピアノ

お金をかけずにグランドピアノを収録しなければならないということで、松山氏（映像松山組）の自宅で、妹さんのグランドピアノを拝借することになりました。

§生ドラム

生ドラムだけは設備の整っているスタジオで収録したかったので、市ヶ谷にあるスタジオ・音楽館で収録しました。ドラムの長井君は一目でヘビーメタルをやっているという格好ですが、とても優しそうな人でした。

§Ｅ（エレクトリック）ベース・Ｅギター

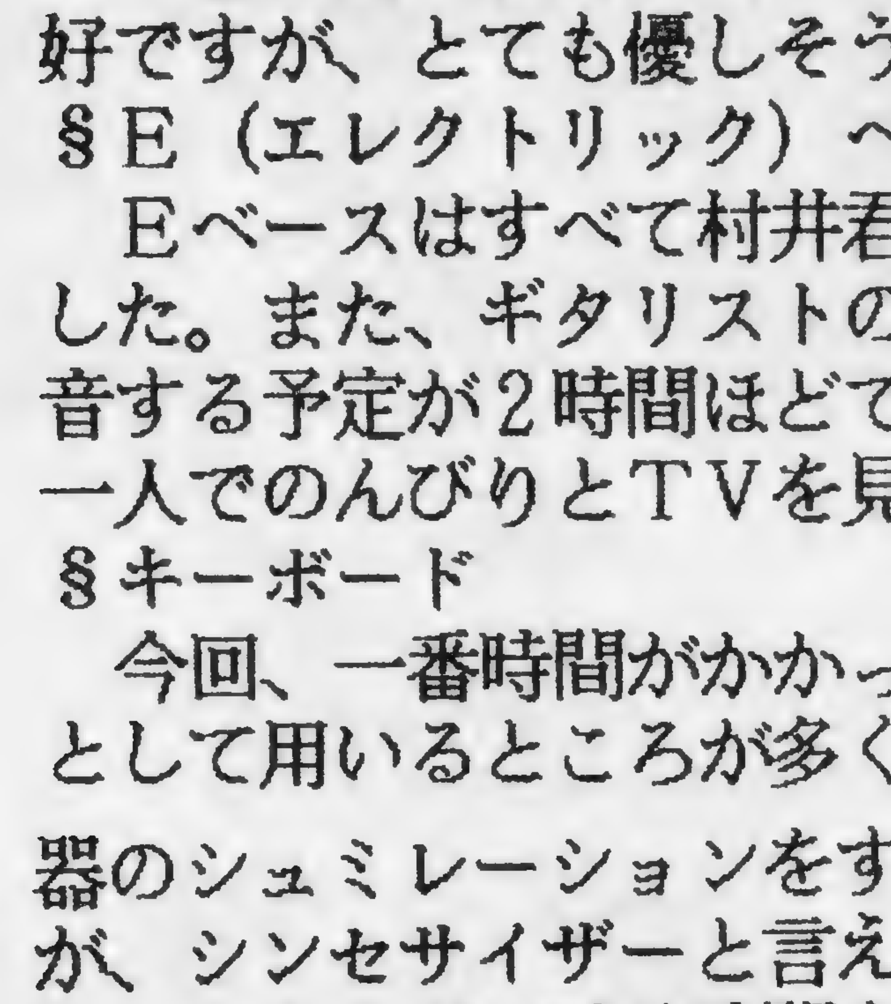
Ｅベースはすべて村井君が自ら弾くことになり、汗だくになりながら練習に励んでいました。また、ギタリストの青木君（音楽スタッフ唯一の大学生）は当初、一日がかりで録音する予定が2時間ほどですべてのギター・パートの演奏を終えてしまい、夕ゴハンまで一人でのんびりとＴＶを見ていたのでした。

§キーボード

今回、一番時間がかかったのがシンセサイザーでした。シンセサイザーは生楽器の代用として用いるところが多く、生楽器とのギャップに苦しみました。シンセサイザーで生楽器のシュミレーションをするのがいかに難しいかを音楽スタッフが監督に説明したのですが、シンセサイザーと言えば万能で何でも出来ると考えている小中監督にはなかなか理解してもらえず、随分時間を費やしたものです。特にフルートの音にはYAMAHAのDX-7を使用したのですが、なかなかOKが出ず、ブレスコントローラーまで使用し、音作りにまる一日費やしたのですが、結局、最初にセットした音になってしまいました。

ストリングスのパートではDX-7とRolandのJX-3P のユニゾン(MIDI 同期）により低音部を演奏し、高音部にはRolandのRS-101(ストリングス・シンセの初期モデル）を使用して演奏するという工夫をしてあります。

また、生楽器のシュミレーションとは反対に、いわゆるシンセっぽい音色を作る時に活躍したのが、モノフォニック・シンセでした。丸茂スタジオに持ち込んだシンセサイザーのほとんどがポリフォニック・タイプやデジタル・タイプ(モノフォニック・シンセは市場で絶滅野危機に瀕している）でしたので、どうしてもソロ・パート(昭雄が自転車で理沙の乗っている車を追いかけるシーン）をやろうと思っても、線が細く、奇麗すぎるのです。困り果てていた時、丸茂スタジオでサビついたモノフォニック・シンセのKORGのMS-20(「落ちぐま」のSEを作ったシンセ）を発見したのでたぶんダメであろうと思いながらも音作りしてみると、意外にイイ音ができるので、早速使用することになったのでした。音楽スタッフ一同、デジタル楽器全盛の時代でもモノフォニックシンセはまだまだ捨て難いことを知ったのでした。



ところで、マルチ・キーボード・プレイヤーとして腕をふるった木住野さんは、とても陽気でチャーミングな女性でした。

§PCM ドラム・マシン

生ドラムの他にPCM ドラム・マシンを使用しました。PCM ドラム・マシンとは、生ドラムの音をサンプリング(メモリーに記録) したもので、スイッチをたたくとドラムの音が出るという便利な機械です。今回使用したのはRolandのTR-707で、木住野さんがこの映画のために購入したものでした。

§コンピューター・ミュージック

一曲だけYAMAHAのCX-5(マイコン) を用いた自動演奏がありますが、特にコンピューターでなければ出来ない曲ではなく、木住野さんが不在だった為に使用したものでした。(コンピューターの打ち込みはとても時間がかかる)

★特殊音響に関して

以前の「落ちぐま」に比べると、スペース音や爆発音といった特殊音を使用するシーンが見受けられないので、逆に制作にあたってはずいぶん悩みました。「星空のむこうの国」では３つの特殊音があり、いずれも昭雄がパラレルワールドに引き込まれていく瞬間に発する重い衝撃音と、それに続く異様な音です。小中監督はイメージする音を「ぼわーん」とか「ズぅゴゴー」とか口で表現するのですが、これを実際の音にするわけですから、試行錯誤の繰り返しになりました。私のイメージはSF映画の「ブレードランナー」の冒頭部に発する重い衝撃音でしたので、それに近い音作りにしたつもりです。３つともほんの数秒ですが、意外と面倒なエフェクト処理を施してあります。

◆エピソード

＊金属磨きのプロ

流星が流れるところで使用したスター・チャイム(真ちゅう管を木に沢山吊るしたもの) がサビてしまい、奇麗な音が出ないので、使用にあたり真ちゅう管を磨くことになりました。しかし、ヒマな人間がいない為、監督自ら30本以上の真ちゅう管を磨くはめになったのです。普通の人なら５本も磨けば手にマメが出来てリタイアするのに、小中監督は２日間に渡って、金属磨き粉とボロ布片手に、もくもくと磨いていたのでした。その無心で健気な姿に音楽スタッフ一同感動し、その後、金属磨きのプロとして尊敬するようになったのです。

♡Marumo Project

＊Musicians

Keybords・・・Yoshiko Kishino
E.Bass・・・・Toshio Murai
E.Guitar・・・Satoshi Aoki
Drum・・・・・Ichiro Nagai
Star Chime・・Kazuya Konaka
All Composed by Toshio Murai
& Yoshiko Kishino

＊Engineer

Recording Engineer・・Marumo
Computer&Synth Program
・・・・・Shigeru Moriyama
Assistand Engineer・・Miwako Kagi
Special Sound Effect・Shigeru Moriyama
Special Thanks to ・・Akihiko Suzuki
Studio:Marumo Studio/Ongakukan
(Ichigaya)

近日発売！
「星空のむこうの国」音楽カセット
(ステレオ・リミックスバージョン)
予価　１０００円

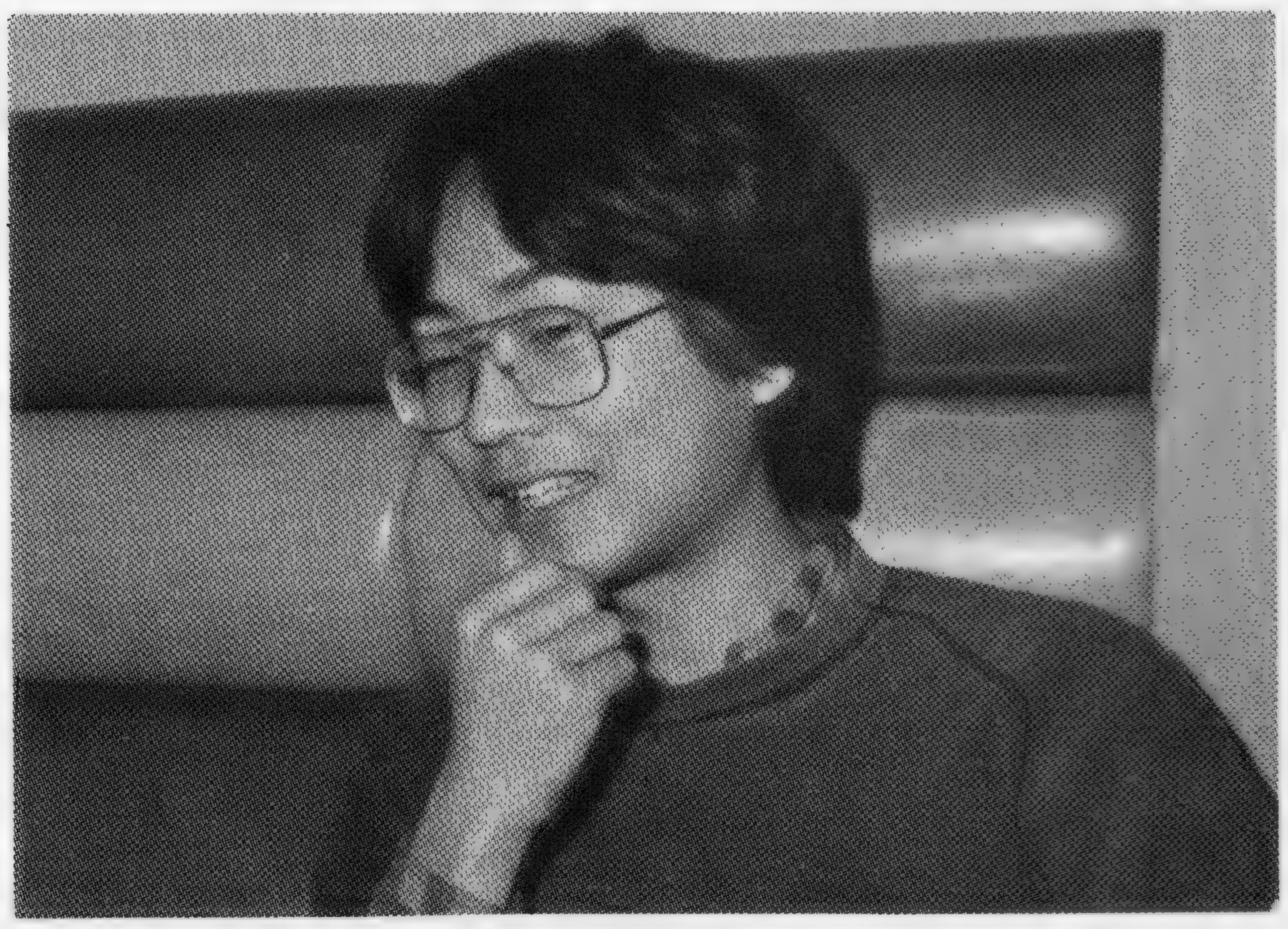
監督インタビュー

聞き手：池田憲章
（アニメ・特撮評論家）

特撮を使わないＳＦ映画

――まず、今回の少年ドラマシリーズってのは、何処から出てきた話なんですか？
小中：最初は、少年ドラマからスタートしたんじゃなくて、元々のきっかけは、「ある日どこかで」なんです。「地球に落ちて来たくま」の仕上げ作業をしてるころ見たのかな、「落ちぐま」は、所謂“ジェットコースタームービー”とでも言いますか、見て面白ければいいというものなんですが、作り終わってみると、それだけではもの足りなくなってきて、どうせ作るんだったらもっと観客の心に残るものを作りたいなという思いがのこりまして。
――それが「ある日どこかで」風なものへと？
小中：そうです。あれ見て僕は本当に泣けまして、そうだ、今度作るやつは泣かせる映画にしよう！というわりと不純な動機から始まったんです。（笑）
――それでラブストーリーになったわけですね。
小中：ええ。「ある日どこかで」みたいに、ＳＦを介在させたラブストーリーを特撮を使わずにやろうというのがこの企画の出発点です。
――特撮を使わないというのは出来ないというのではなく、あまりそちらには力点をかけた作品にはしたくないということで？
小中：まず単純に「落ちぐま」でさんざん特撮をやって、もうしばらくやりたくないと思っていたことと、ＳＦ＝特撮という悪しき日本映画のイメージを打破したかったということですね。本当はＳＦっていうのはテーマを語る上での手段でしかないわけでしょう？ところが日本映画ではＳＦがただの売り文句にしか成ってなかったりするのがほとんどでしょう。
――ＳＦを見世物映画と俗に言うんだけど。（笑）
小中：そういう風に低く見られているＳＦ映画の地位を向上させるためには、まず特撮を使わずにちゃんとＳＦを成立させ、しかもそのＳＦ的シチュエーションがテーマを語る上で有効に機能しているという作品を作るべきだと思うんです。

最初はテレパスものを企画



――パラレルワールドものというのは最初から？
小中：最初は小林さんのアイディアでテレパスものをやろうとしたんです。僕がやりたかったのは、男女の恋愛で、二人の間に何かのＳＦ的設定を置いて、簡単には結ばれない状況を作ってその葛藤を描き、ラストでようやく結ばれるという、「ある日どこかで」のパターンなんです。それを小林さんに話したら小林さんが出してきたのが、女の子の方がテレパス能力を持っているという設定で、人の心が読める人間が恋愛をすることができるか？という話だったんです。でも取り組んでみると、これはえらく大変なテーマでして。
――小説とかだったらまだしも、実際映像にするとなると、なかなかむずかしいと思いますよ。
小中：ええ。それに、男の裏の心を読みながらもその男を女の子が好きにならなくてはいけない話だから、性の問題も含めた人間の赤裸々な心理をキチンと把握してないと作れない映画でしょ。経験の浅い今の自分には無理だと思えてきたんです。（笑）
――月曜ドラマランドみたいに、逆に完全なライトコメディーにしちゃえば話は別だと思うけど、それじゃあ本末転倒だもんねえ。（笑）

初恋物語＝理想の恋愛像

小中：で、その話はやめて、じゃあ初恋ものにしようと思ったんです。初恋っていうのは、最初の恋愛経験だから、それまで憧れとして持っていた恋愛像を純粋に追っかけようとしますよね。経験が浅いからこそ、そういった理想の恋愛像をまだ本気で描けるんじゃないかと思ったんです。

──ある程度、作家側も本気で作れるということですね。

小中：僕の恋愛観も作ってる間にだいぶ変わりましたけど。（笑）赤い糸伝説のＳＦ的解釈みたいな話なんですけど、そういった運命的な出会いというのを、小さい頃なら誰でも恋愛に対する憧れと共に夢想していたと思うんですよね。初恋の時には、その夢想していた相手が「あっ、この人なんだ」と感じると思うんです。何度も恋愛を経験しちゃうとそうとは思わないだろうけど。（笑）

──僕なんかも、少年ドラマが何で面白かったかというと、小学校上学年から中学のある時期って、何で戦争なんかがいつまでもなくならないんだろうとか、そういうことが突然疑問になってきて、二十歳くらい過ぎるとしょうがないんだって感じに自分を落ち着けることができるんだけれども、そういう少年期特有のヒューマニズムっていうか正義感ってあるじゃない。少年ドラマって、そういう中学・高校生じゃないとあり得ないシチュエーションだと思うんですよね。

小中：そこがやっぱりジュブナイルものの良さですよね。正論を正論として言えちゃうってところが。

ヒッチコック映画から　サスペンス演出を学ぶ

──脚本はどういった形で進めていったんですか？

小中：シノプシスは僕が書いて、第一稿を小林さん、第二稿は僕、というふうに二人で相談しながら交互に書いていきました。それで、第五稿で藤田くんというまだ１０代の、ディレカンのシナリオ公募で入選したりしているライターにセリフ面でちょっと参加してもらったりして、第七稿でやっと決定稿にしました。

──稿を重ねてどう変わっていったんですか？

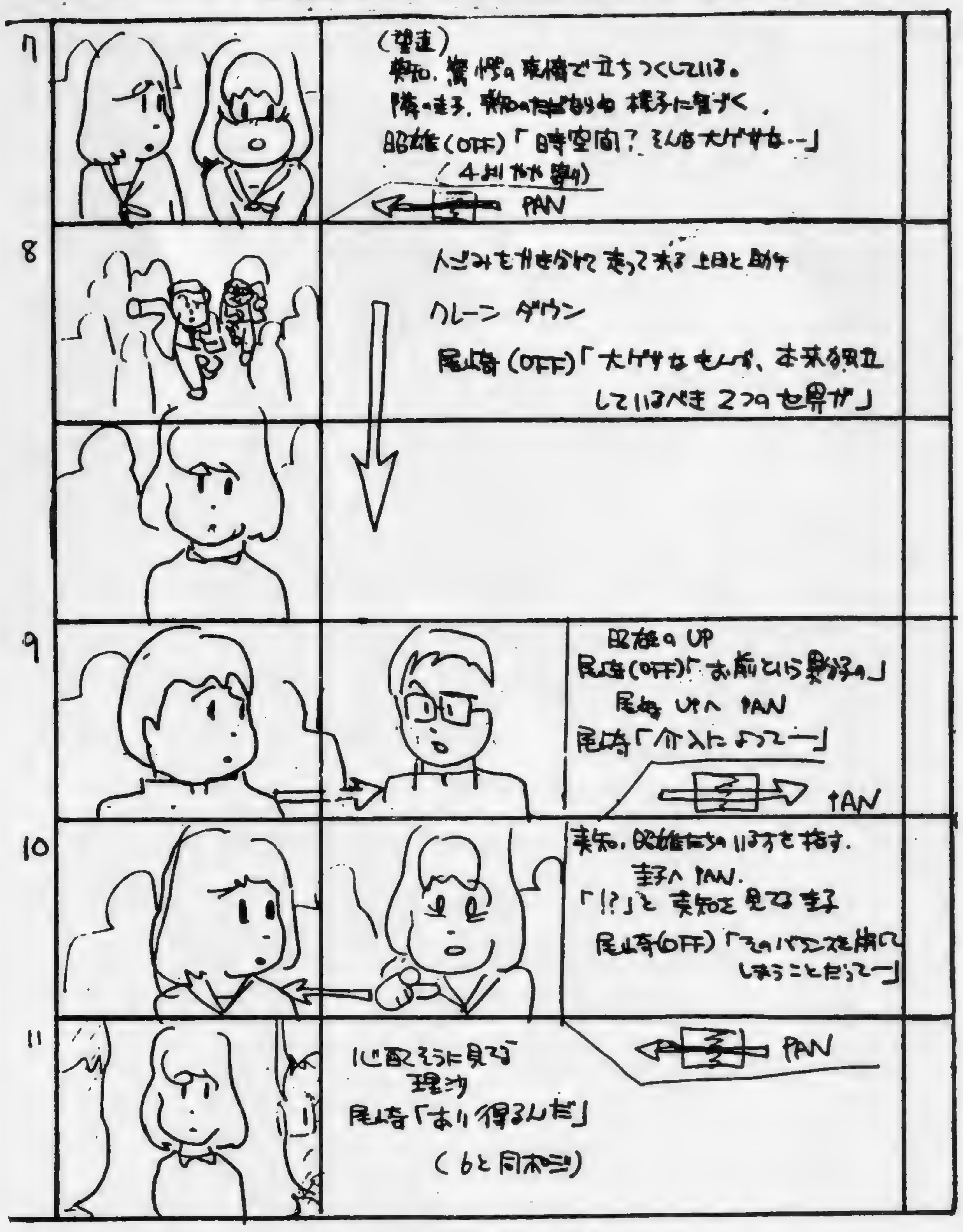
小中：初めの頃は登場人物が少なくて、努，拓郎，美知，圭子といったのは後から増やしていったんです。あと、パラレルワールドの説明をジャングルジムでやるといった設定も後からつけてったものです。

──あの説明は判り易かったですね。今まで映像であういうふうに判り易く見せてくれたのって、他にないんじゃないでしょうかね。

小中：それと、シナリオの直しをやってた頃丁度ヒッチコックのリバイバルやってて、それ見て結構ぬすんだりしてるんです。

──ヒッチコックのどの映画で？

小中：例えば「裏窓」の最後の方で、ジェームズ・スチワートの方に殺人者が気づいてやってきますよね。その時、ジェームズ・スチワートと殺人者の単純なカットバックではなくて、もう一つ自殺しそうなオールドミスという要素を加えて三点のカットバックをやっているんです。ただでさえ自分のところに殺人者がやってくるというのに、さらにもう一つハラハラさせる要素を加えて、よりサスペンスを盛り上げるという、心憎い演出ですね。これをぬすんで、商店街で理沙たちが上田たちに追いつかれるシーンで、単純な二者のカットバックではなく、美知と圭子も加えてサスペンスを強めようとしたわけです。



▲小中監督の絵コンテ

自転車チェイスに苦心

──非常に驚いたのは、編集を御自身でされていますよね、まあ自主映画では当然なんでしょうが、１６㎜の編集は初めてですよね。

小中：ええ。でも編集に関しては８㎜と変わんないじすよ。むしろ８㎜よりやりやすいですね。

──非常に編集が素晴らしいですね。ものすごく生理に合うというか、気持ちいいですね。

小中：編集は時間がかかりましたね。カット数多いし、大分フィルムも廻しましたから。

──自転車の追っかけシーンなんかもよくできてましたね。

小中：やっぱりあのシークェンスが一番時間がかかりましたね。
——日本のカーチェイスって、すごくトロイでしょ。基本的に撮れる場所がないっていうのがあるんだろうけど、あれはどこで撮ったんですか？
小中：うちの近所の成城近辺です。
——空がぬけててよかったですね。カメラポジションも低くて道が流れる感じもよく出てて。あれはどうやって？
小中：車の前後のバンパーにカメラを固定できるように特殊機材の河村さんに作ってもらったんです。河村さんとは「落ちぐま」からの付き合いで、いろいろな機材を作ってもらってお世話になってまして、二人で話してるんですが、日本映画って移動効果にしろ特撮にしろ、まず機材があって、それが出来ることから考えていくみたいなところがあるでしょう。本来はそうではなくて、まず最初にイメージがあって、それが従来の機材では撮れないものだったら、機材を作るというところから始めないとダメだと思うんです。むこうの特撮なんか、そのショット専用のカメラを作るとこからやっちゃうでしょ。
——ジャングルジムのシーンなんかでも面白い撮り方してましたね。
小中：あれは、河村さんに作って貰ったミニクレーンを台車に乗せて動かしているんです。
——昭雄と尾崎の電話のシーンは思わず笑ってしまったけど。（笑）
小中：あれはやりすぎでしたか？（笑）
——でも最近ああいうことをどんどんやらなくなってるから、懐かしいって言ったら悪いけど、非常に面白い効果だったと思いますよ。モノクロとカラーの色分けっていうのはどういうところから出てきたんですか？

モノクロの世界をカラーの世界に変える話

小中：パラレルワールドと現実の世界を色分けするっていうのはまあ、「オズの魔法使い」ですね。一番ストレートで判り易い方法でしょ。ただし、ラストのモノクロからカラーへのオーバーラップに関しては、世界が移ったというシーンではないわけですよね。それまで現実の世界をモノクロ，パラレルワールドをカラーと色分けしてきたと思わせていたのが、ラストのオーバーラップになって、理沙のいない世界がモノクロ，理沙のいる世界がカラーという風に色分けされていたんだってことになるわけです。だからこの話は、理沙と出会えなかった歴史を修正して、ちゃんと出会えるような世界にした、つまりモノクロの世界をカラーにしたという話なんです。

——そうですね。ラストの世界を第三のパラレルワールドだと解釈しちゃうと、話としてはちょっとつまらないな、という感じはしたんですね。タイムマシーンもので、未来が変わるっていうのもドンデン返しの打ち方の一つの定石だし。
小中：ラストシーンのように二人が出会うのが正しい歴史であって、すべてはその出会うべき二人が出会わなかったことから始まっているわけです。そんなたった一つの小さな出会いが行われなかった為に時空が歪み始めてしまう、逆に言うと出会いというのはそれだけ尊いものなんだ、ということですね。
——それが隠しテーマですね。（笑）
小中：だから、観客が映画を観おわって、そのあと誰かとの出会いがあった時に、何気ない出会いのようにみえて実は昭雄と理沙のように運命的なものなんじゃないか、とか思って、その出会いを大切にしてくれたら、作者としては嬉しいわけです。だってそう考えた方が人生楽しいじゃないですか。（笑）
——それが冒頭の“まだ出逢っていない恋人たちへ——”というタイトルの意味ですね。

赤い糸伝説は主観的なもの

小中：そうです。けれども最近思うんですけど、出会えたから安心、めでたしめでたしというわけでは決してないんですよね。
——というと？
小中：運命的な出会い＝赤い糸伝説というのは非常に主観的なものであって、つまり、その存在を信じているからこそ、赤い糸はしっかりと二人を結びつけていてくれているのであって、それを二人のうちどちらか一方でも疑おうものなら、たちまちのうちに切れてしまうものなんです。
——これは続編を作らないといけませんね。（笑）
小中：ええ。（笑）でも、本当のドラマは出会ったあとから始まるのかもしれませんね。このテーマはいつかやってみたいですね。

（12月6日　渋谷ロロにて）

小中和哉は才能の人である

文：手塚真

それは僕が高２の春でした。と、何やら青春ぽく始めてしまいましたけど、僕が在籍していた映画研究部でも、新年度に向けて部員を増やそう（何しろ５人しかいなかった）、新入生を歓迎しようと企てまして、当時は珍しかった「スターウォーズ」のストーム・トルーパーマスクをかぶり、当時はまだ日本では封切られていなかった「未知との遭遇」式手話で新入生を歓迎したわけです。すると一人の、いかにも特撮が好きですと言わんばかりに眼鏡をかけたそれ風の新入生がやってきて、入部したいというじゃありませんか。結局この年は豊作で、男女合わせて１２人も新入生がひっかかったわけでありますが、何やら無愛想なノッポやら、やたらと調子のいいお喋り魔がいたりで、８ミリとはいえこんな奴らが映画を作れるのかいなと一抹の不安も無きにしもあらずであったのです。

そこで君達、試しに何か短編映画でも撮ってごらんなさい。いや、何もうまくできなくても恥ずかしくないのだよ。ちょっとカメラの練習でもしなさいと、先輩風を吹かせて短編映画を作らせてみたら、これが何と、ちゃんとできている上に、面白いじゃありませんか。

だ、だ、誰ですかコレを作ったのは？と、動揺する心を抑えて彼らに尋ねると、あの特撮好き風の眼鏡少年がおずおずと手を上げるのです。そのとき、「こいつはエライ才能がある！」と唐突に感じてしまい、以来私はこの人に対して少なからず畏敬の念を抱いているのであります。

その小中くん（僕らは初めのうち、この人の名は“大”というのではないかと想っていた。そうしたら本当に面白いと想った）はその後映研の部長になり、作った８ミリは僕でさえ「特別賞」しかいただけなかった「映像記録フェスティバル」で大賞だけではなく文部大臣賞まで貰い、成蹊高校映画研究部を日本一の桃太郎にしてしまったのです。いや、アッパレ。

後にお喋り魔のお調子者は「終」という高校生にあるまじきとんでもない名作８ミリを作り、大阪芸大へ飛んで「うしろあたま」などという１６ミリの撮影をやったりしている無愛想なノッポも「教訓Ｉ」という８ミリによって見事映画作家への道を歩き始め、利重剛という芸名でプロの俳優になったのです。

さて、そんな中で我らの小中君は、やっぱり第一印象どうり特撮が好きで、いつも元気の良いエスエフ映画を作っては僕らをニコニコさせてくれているのです。僕らはニコニコしながら、しかし内心ではやはり「この男は恐ろしい才能がある！」とビビっているのでありました。

そんな小中君が初めて８ミリ以上のフィルムを使って作った「星空のむこうの国」は、やっぱり彼らしいニコニコ・エスエフとあふれる才気が合体した超合金メカのゼーターガンダムなのです。この人はこのところ私ら若年寄りが忘れかけている“希望”という恥ずかしい単語を復活させられるまさしく希望の星なのであります。行け、日本の映画を救うのは君しかいない！行くんだ、行って救うのだ、小中和哉！ガンバレ小中、負けるな和哉！愛と平和と特撮のために、闘え、小中和哉！

♫次週をお楽しみに。

「星空のむこうの国」ビデオ販売のお知らせ！
１月２５日　大映ビデオより発売
●ＭＦＨ－１２２９（ＶＨＳ）
●ＭＦＢ－１２２９（ベータⅡ）
＊モノラルＨｉＦｉ／カラー７６分
お問い合わせ：大映株式会社　映像事業部
℡０３（５０８）２６３１

小中和哉フィルモグラフィー

昭和３８年、三重県生まれ。小学校５年生の時、兄・千昭と共に８㎜映画を作り始める。共同で書いた脚本を千昭＝監督，和哉＝主演で二年がかりで完成させたのが、『インベーダー』（７５）。中学２年で、成蹊中学のクラスメート，栗村新と共にリトルマロンプロを結成、当時流行っていた『ＪＡＷＳ』のパロディー映画，『ＣＬＡＷＳ』（７６）で初監督。

成蹊高校入学と同時に映画研究部に入部、一年先輩の手塚真の処女作・『ＦＡＮＴＡＳＴＩＣ☆ＰＡＲＴＹ』（７８）に出演者として参加。映研の同期には、『終（しゅう）』（８０）の寺田裕之，後に役者となる利重剛こと笹平剛らがいた。

８１年、立教大学法学部に進学と同時にＳ．Ｐ．Ｐ．に入部。長編・『地球に落ちて来たくま』（８２）を二年ががりで完成させた。

８５年、同大卒。現在、メディア・ワークショップ・ディレクターコース所属。

▽監督作品

☆『ＣＬＡＷＳ』（７６／８㎜／１５分）
製作：リトルマロンプロ　出演：栗村新，村田宏，石原洋，新田久夫
※人喰い熊がおそってくる恐怖映画。ＣＬＡＷＳとは、爪のこと。

☆『ＴＨＥ　ＴＩＭＥ　ＭＡＣＨＩＮＥ』（７６／８㎜／３分）
製作：ＢＣＡ　共同脚本：石原洋　声の出演：小中和哉，小中千昭
※タロー少年と愛犬ブースケの時間冒険旅行。キリヌキ＆ペーパーアニメ。

☆『THE ADVENTURE OF TARO 』（７７／８㎜／３分）
製作：リトルマロンプロ　共同脚本：栗村新
※ペーパー，キリヌキ，人形の３つの手法によるオムニバス・アニメ。

☆『タイム・リターン』（７８／８㎜／１８分）
製作：リトルマロンプロ　出演：栗村新，髙橋喜男
※突然、時間が逆転しはじめるという、ＳＦもの。

☆『くまちゃん対ドラゴン』（７９／８㎜／３分）
製作：リトルマロンプロ　共同作画：栗村新
※初のセルアニメ。くまちゃんとドラゴンの死闘。作画枚数２００枚。

☆『ＴＵＲＮ　ＰＯＩＮＴ　１０：４０』（７９／８㎜／３３分）
製作：成蹊高校映画研究部　特撮監督：笹平剛　音楽：村井俊夫＆JUPITER
出演：小沢広志　山本奈津子
※『タイム・リターン』のリメイク。人類矯正計画とは――？
◎第７回日本映像フェスティバル　高校部門大賞，文部大臣賞，読売新聞社賞。

☆『いつでも夢を』（８０／８㎜／４分）
製作：ＢＣＡ　出演：川上裕美子，大村卓也
※橋幸夫と吉永小百合の往年の名曲に乗せて送る，明朗無責任ミュージカル。
◎‘８０富士8ミリコンテスト　学生グランプリ。

☆『青カビだらけの夜　エピソードＩ　カラフルな想念の乱舞』（80/8㎜/12 分）
製作：成蹊高校映画研究部　出演：小沢広志，村井俊夫，寺田裕之，笹平剛
※「青カビ・シリーズ」第二弾。“オザワ”と彼を追う３人の男たちの戦い。
◎‘８０富士8ミリコンテスト　学生奨励賞。

☆『進め！　くまちゃんパトロール』（８０／８㎜／９分）
製作：リトルマロンプロ　声の出演：山本奈津子，民部美保，大西裕子
※ペーパー，キリヌキ，セルアニメ。一年がかりで製作。

☆『サマー・ハイ・ボール　冒険篇』（８１／８㎜／９分）
製作：青カビプロダクション　出演：小沢広志，うさぎ男
※「青カビ・シリーズ」第三弾。戦いに敗れた“オザワ”を待ちうけていたのは？

☆『地球に落ちて来たくま』（８２／８㎜／６０分）
製作：リトルマロンプロ＆Ｓ．Ｐ．Ｐ．　撮影：荒井教善　特撮監修：河村豊
音楽：村井俊夫　出演：津畑富貴子，小沢広志，山本奈津子，矢野ひろみ
※ぬいぐるみのくまそっくりの宇宙人がまきおこす，ＳＦサスペンスコメディー。
☆『ＭＡＫＩＮＧ　ＯＦ　地球に落ちて来たくま』（８２／８㎜／１５分）
出演：湯本ひろゆき，小口基史，森山繁，玉手久也，津畑富貴子，小沢広志
※『落ちぐま』のドキュメンタリーフィルム。
☆『THE LAST PICTURE SHOW OF　フーちゃん』（８３／８㎜／４分）
製作総指揮：小沢広志　出演：津畑富貴子，くまちゃん
※不思議の国のアリス風ミュージカル。津畑富貴子嬢の引退記念作品。
☆『ＴＨＥ　ＤＡＲＫ　ＳＩＤＥ　ＣＩＴＹ』（８３／ＶＴＲ／８分）
製作：Ｓ．Ｐ．Ｐ．＆プロダクション‘７５　出演：福田雅之，小口基史
※新宿版『ニューヨーク１９９７』をめざした、バイオレンス・ＳＦ。
◎大学対抗ビデオコンテスト　佳作
☆『青カビだらけの夜　エピソードⅣ　鋼鉄都市――或いは、オザワ・ヒロシの帰還』
製作：青カビプロダクション　出演：小沢広志　　（８３／８㎜／１５分）
※「青カビ・シリーズ」完結篇。ついに、“オザワ”は、最後の戦いを迎える。
◎ＰＦＦ‘８３　プレフェスティバル　上映作品。
☆『いつでも夢を』（８４／ＶＴＲ／１５分）
製作：青カビプロダクション　出演：寺田裕之，藤掛聖子，高橋喜男
※「いつでも夢を」（８０）の架空の後日談。浮浪者になった映画作家の見た幻。
◎おもしろビデオコンテスト　佳作。
☆『星空のむこうの国』（　／１６㎜／７６分）

▽出演作品
☆『インベーダー』（７５／８㎜／１５分）監督：小中千昭　共演：川崎健
☆『ＦＡＮＴＡＳＴＩＣ☆ＰＡＲＴＹ』（７８／８㎜／５０分）監督：手塚真
☆『ＳＭＯＫＥＲ　３』（８１／８㎜／３０分）監督：平野和重　共演：鏑木光江
☆『メロディー・メーカー』（８２／８㎜／３０分）監督：平野和重　共演：鏑木光江
☆『と・き・め・き　イチョウ通り』（８３／８㎜／５０分）監督：佐々木明宏
☆『真夏の夜は　ＮＯ・ＴＩＭＥ』（８５／８㎜／６０分）監督：松山仁
☆『ドレミファ娘の血は騒ぐ』（８５／３５㎜／８０分）監督：黒沢清

▽撮影担当作品
☆『雨天決行』（８３／８㎜／２０分）監督：勝野宏　製作：ＳＰＰ　出演：戸田慎一
☆『畳の歌声』（８３／８㎜／３０分）監督：高橋喜男　製作：青カビプロダクション

▲「地球に落ちて来たくま」

▲「THE LAST PICTURE SHOW OF　フーちゃん」

STAFF

製作　三浦大四郎
　　　小中和哉

企画　一瀬隆重
　　　鈴木　一

プロデューサー　浜田耕作

脚本　小林弘利
（ノベライズ版 集英社文庫コバルトシリーズ刊）

原案　小中和哉

ダイアローグ協力　藤田一朗

撮影　瓜生敏彦

撮影助手　桜井　徹

撮影協力　後藤麻夫

照明　片山竹雄
　　　及川一郎
　　　塩田明彦

整音　福田　伸

効果　福島幸雄

効果助手　西岡正己

美術　角田　亮

美術協力　細井　篤

助監督　神藤光裕
　　　　角田　亮
　　　　中平勝之

進行　丹羽多聞

進行補　高橋健司

メイク　藤掛聖子

衣裳　久保田祥子

記録　鍬田早苗

会計　花岡ちなつ

ミニクレーン製作 特撮監修　河村　豊（CANET）

アニメーター　進藤丈夫

写真効果　斉藤純二

大クレーン製作　高岡淳夫

スチール　平野和重

音楽　木住野佳子
　　　村井俊夫

演奏　村井俊夫
　　　木住野佳子
　　　長井一郎
　　　青木　聡

特殊音響　森山　繁

録音スタジオ　福島音響

音楽録音　*Marumo Project*

国鉄ロケコーディネイト　神定封之

編集　小中和哉

ネガ編　小宮サク

現像所　ソニー・PCL

フィルム　報映産業

撮影機材　光映新社

特機　東宝特機部

協力

太田龍也　松山　仁
磯野好司　森本レオ
占部博司　鈴木良紀
小口基史　岩田素子
家永京子　鈴木昭彦
大山勝美

スタジオR
株式会社ぴあ
妙法寺
関東中央病院
成蹊学園
立教大学S.P.P.
メディア・ワークショップ

大澤　豊（こぶしプロ）

監督　小中和哉

製作　文芸坐
　　　パラレル・ワールド

CAST

昭　雄	神田裕司
理　沙	有森也実
尾　崎	関　顕嗣
圭　子	岡部美鈴
美　知	藤掛聖子
努	吉田篤郎
拓　郎	神藤光裕
夏　美	寺田久美
友人A	佐野智子
友人B	草野厚子
まりの少女	茂木香織
酒　屋	牛山真一
上田の助手	平野和重
看護婦A	久保田祥子
B	西郷紀子
C(声)	芹沢淳子
D(声)	宮崎和子
用務員	岸野雄一

商店街通行人

黒沢　清　梶原浩規
赤坂大輔　花岡ちなつ
中平勝之　丹羽多聞

生徒たち

高橋健司　高岡淳夫
榊原久雄　江川昌久
織田美智雄　大江利昌
杉野正明　野中光行
佐野智浩　小木曽　浩
千田浩司　高田　勉
佐々木公紀　佐々木明宏
安原広和　吉田俊弘
伊藤寧彦　井ノ口　卓
松崎公正　村松孝芳
篠崎　誠　坂上良弘
藤森　健　藤本吉郎
多田健二　武井　潤
服部光之　伊藤　純
佐藤順一郎　島津昭彦
高島伸幸　岩岡禎尚

厚田洋子　桜庭郁子
渡辺公子　川上佳織
藤田京子　芳屋奈津美
中村仁子　中村恵子
小川裕子　大柳久美子
中川キミエ　松本カオリ
村上みゆき　斉藤美恵子
山川美佐　柳沼礼子
小村恵美　室井由紀子
白川典子　岡安晶子
西沢有香　武末久美子
栗原清子　伊藤倫子
池田順子　渡辺美佐
宮本由紀子　松井三枝
松沢真理子　柳沢ともえ
渡辺里美

昭雄の父(声)	桜井英一
先　生	小沢圭介
医局長	泉　大助 (特別出演)
上　田	木村善孝

「星空のむこうの国」パンフレット

印刷　1985年　12月27日
発行　1986年　1月　2日
編集スタッフ　花岡ちなつ
斉藤純二
小中和哉
発行所　パラレルワールド
〒157
東京都　世田谷区　祖師谷　5－22－34
(小中和哉　方)

これが'86

YOUNG JUMP

新年6号1月4日(土)発売

'86年もこれしかない、ダントツ面白い!!特別定価200円

年の顔だ!!
第13回青年漫画大賞佳作
チャリンコに乗った
ロックンローラー
喜国雅彦
ハードロックに熱中するかたわら、剣道に燃える少年の型破り青春。
孔雀王
荻野　真
悪がはびこる現代のメトロポリス・東京を舞台に孔雀の密法が炸裂する!!孔雀に勝機は!?
無敵の空手部主将・高木の大活躍と一年生部員のつらい青春を活写。
押忍!!空手部
高橋幸二
150万部独走!!
みんなあげちゃう♡
かっとびハート
緑山高校
ザ・サムライ
弥生の大空
春ウララ
ド忠犬ハジ公
いとしのエリー
マッド★ブル34

SOMEWHERE OVER STARS